

1234 5678 910

「コミュニティとアート」
被災地いわきからの提言
～来るべき超高齢化社会のために～

編著：特定非営利活動法人 Wunder ground

福島芸術計画 ×ART SUPPORT TOHOKU-TOKYO 2015 年度事業報告書







1 2 3 4
5 6 7 8
9 10

コミュニティとアート

被災地いわきからの提言

「来るべき超高齢化社会のために」

はじめに

福島藝術計画 × ART SUPPORT TOHOKU-TOKYOとは？

下神白復興公営住宅についての基礎知識

「イトナミニティプロジェクト」事業振り返り

いわき七夕プロジェクト

ちぎり絵屏風 ～手で紡ぐコミュニティ～

おでんプロジェクト ～食べて笑うコミュニティ～

マナビバ。～アートとコミュニティの出会い～

10の提言

提言1 コミュニケーターとコーディネーターが鍵

提言2 アーティストはコミュニケーションのきっかけを作る

提言3 住民との信頼関係を作る

提言4 アートで日常を作る

提言5 母ちゃんたちには手作業でコミット

提言6 父ちゃんたちはDIYでコミット

提言7 食は土地と人を結びつける

提言8 作業を細分化する

提言9 否定せずに受け止める

提言10 ゴールを作る

検証・イトナミニティ 当事者かく語りき

下神白復興公営住宅の住民 穴戸光雄さん（浪江町）

下神白復興公営住宅の住民 小野田恵子さん（大熊町）

みんぶく・コミュニティ支援員 鈴木詩織さん、小松由美恵さん

参加アーティスト とつくぬ

2015年度事業報告会レポート

寄稿

高齢社会における仕組みづくりとコミュニティアート

文化芸術の華が咲き誇る福島

被災地にいる精神科医からの、アートへの期待

あとがき

人を紡ぐアートプログラム 実施記録

東日本大震災から5年が経とうとしています。5年という歳月を長いと感じるか短いと感じるかは、本当に人それぞれだと思います。しかし、5年経って変わったことを数えてみると、どれほどの人の時間と労力によって今の状態があるのかを感じるができます。被災地であればなおさら、それを感じるでしょう。

本書は、福島県いわき市小名浜にある下神白復興公営住宅で行った、福島藝術計画×ART SUPPORT TOHOKU-TOKYOの今年度の取り組み「イトナミニティ」について記しています。

はじめに、いわき市の概要についてご説明します。

いわき市は、福島県浜通り南部に位置する市で、比較的寒暖差が少なく、山間部を除いて滅多に降雪のない温暖な土地です。台風被害も少なく、自然災害には縁遠い地域でした。太平洋に面する海岸線は60kmに及び、海以外にも山、川、温泉のほか、昭和30年代まで採掘していた炭鉱もあり、資源に恵まれた土地と言えます。

1966年（昭和41年）、当時の基幹産業であった常磐炭田と水産業が斜陽化したことを背景に、新産業都市建設促進法に基づく開発地域の指定を受けて5市4町5村が合併。衰退から脱却するチャンスとして一つの市になり、「平成の大合併」があるまでは1231・35平方km（東京23区の約2倍）の市域面積が日本であつた広大な市でした。常磐炭田と水産業をそれぞれ「観光」をキーワードに観光資源として活用することで方向転換に成功しましたが、市街地間が丘陵によって緩やかに分断されていること、商業・漁業・工業・温泉・炭鉱といった街ごとの特色の違いもあり、一体化による発展をしながらも、旧市町村の独立性は残りました。旧市町村の独立性は、合併から50年近く経っても依然として残っており、震災が起きたことでより顕在化しています。そのような状況下で避難者を受け入れたことで、それぞれの地域アイデンティティが混在し、立場や世代、価値観の違う様々な人が共存することで、いわき市のコミュニティは一層複雑化したと言えます。

いわき市は、交通インフラの整備により関東圏への便が良くなったことから緩やかに人口が減少していましたが、山間部、丘陵地が多いため可住地面積の割合は県内の市の中で最も低く、2016年2月現在の人口約34万9000人は平地に集中して住んでいます。震災後は、原発事故や津波被害によって避難された方と、原発事故収束に向けて作業員が流入していることも、様々な課題を生み出す要因の一つとなっています。

そのように、様々な価値観のもとで暮らしていかなければならない市民の心の拠り所となる支援を展開していくにあたって、私たちには何が必要なのか——複数の立場を持つそれぞれの知見やノウハウを学ぶことで、今後起こり得る様々な課題に備えた支援策をマネジメントできる人材を育成することを目的に、昨年度私たちは文化・芸術・アートの視点から被災地のこれからを考えていくプログラム「マナビバ。」を実施しました。

「マナビバ。」では、職種や活動地域の異なる8名の講師による学びの場・語りの場で、いわきの現状と課題、地域が豊饒化していくための住民の役割、表現の場と機会を作ることの重要性、他地域での支援活動事例、個々のこころの問題への対応について学びました。そこで繰り返し話されていたのは、開かれた「場」を作ることでした。それはカフェであったり、部室であったり、縁側であったり、お寺であったり、何もない空間であったりしました。その開かれた「場」に、共通の条件のもとで集った人たちが、自立しながら寄り添うことができるようになることが大切だということを学びました。

しかし、「場」はできても住民が集わなくては意味がありません。そこで、目に

見えない「コミュニティ」を形にすることができるアーティストを紹介することで、人が集い、住民同士がよりスムーズに存在を認め合い、双方にとって負担のない状況が生まれるようになる。その事例も知ることができました。

仮設住宅や借上住宅にお住まいの方々は、移動するたびにコミュニティの再構築を余儀なくされています。震災から5年が経とうとしている今、仮設住宅で暮らしてきた方は、いわば「終の住処」にもなり得る復興公営住宅に入居し始めています。中でも、いわき市小名浜の下神白地区にある復興公営住宅は、立場や世代、価値観、被災状況や補償内容等、個々の状況が全く違う双葉郡内の様々な町村の方々が同じ団地に暮らしている状況であり、地域としてコミュニティ構築が難しいと懸念されています。

そこで、私たちは下神白復興公営住宅にある集会場という「場」に着目しました。集会場にアーティストが入ることによって、コミュニティの再構築を図ることができるのか——昨年度の「マナビバ。」によって得た知見から、今年度はアートによるコミュニティ再構築支援プロジェクト「イトナミニティ」を開始することとしました。



東日本大震災から5年。
福島の未来を担う子供たちが、ふるさとの自然や文化を体験し、
心豊かに成長していくこと。
福島県ならではの多様な文化を、地域の隔たり無く分かち合い、
もう一度その素晴らしさを互いに見直すこと。
福島の現状や未来のことを考え、創造する場を持つこと。
福島の宝や人の思い、そして大切な何かを繋ぎ・つたえていく。
そうした動きが、福島の復旧・復興に向けて大きな力になると信じ、
福島藝術計画 × ART SUPPORT TOHOKU-TOKYO は前進します。

福島藝術計画 × ART SUPPORT TOHOKU-TOKYO について

福島藝術計画 × ART SUPPORT TOHOKU-TOKYO は、福島県、東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）の三者が共催し、地域の団体と協働してアートプログラムを実施する事業です。文化芸術に触れる機会や地域コミュニティの交流の場をつくり、文化芸術による地域活力の創出と心のケアという視点から復旧・復興を支援します。

2015年1月 建設完了。入居開始。
2015年5月 コミュニティ交流員が住民向け集会所内覧会を実施
2015年6月 毎週金曜日に集会所を開放した交流会を開始
現在に至る

<世帯数>

富岡町 80世帯(1～2号棟)
大熊町 35世帯(3号棟)
浪江町 60世帯(4～5号棟)
双葉町 25世帯(6号棟)

下神白復興公営住宅とは？

今年度の事業について詳しく振り返る前に、ここでは、その舞台となったいわき市小名浜の下神白復興公営住宅について少し詳しく見ていきます。団地がどのように生まれ、そしてどのような問題を抱えているのか。アートプロジェクトが計画された、その背景を、まずは共有して下さい。



下

神白復興公営住宅は、東京電力福島第一原子力発電所の事故によって、いわき市に避難してきた双葉郡4町の200世帯が、町毎に棟を分けて居住している県営の公営住宅です。6棟からなり、富岡町80世帯（1～2号棟）、大熊町35世帯（3号棟）、浪江町60世帯（4～5号棟）、双葉25世帯（6号棟）が暮らしています。入居が始まったのが2015年1月。それまでは借り上げ住宅や仮設住宅などにバラバラに暮らしていた方々がこの団地に集まり、新たな暮らしをスタートさせました。

原発事故から5年近くの間、何度も転居を余儀なくされたり、慣れない土地での暮らしを強いられていたこともあり、入居者や地域住民との交流活動を支援する目的で「福島県生活拠点コミュニティ形成事業」が計画されました。その事業を受託したのが「NPO法人3.11被災者を支援するいわき連絡協議会（みんぷく）」です。みんぷくでは、現在50世帯に対し1人の割合でコミュニティ交流員を配置。住民に対するきめ細やかなケアを行いつつ、団地の集会所を拠点に住民コミュニティの再構築のための様々な取り組みを進めています。

2015年度のいわき地区全体を見ると、下神白復興公営住宅（200世帯）以外にも、湯長谷復興公営住宅（50世帯）、八幡小路復興公営住宅（12世帯）、関船復興公営住宅（27世帯）の、計289世帯が暮らしており、これらすべてをフォローするため、コミュニティ交流員5名、スーパーバイザー1名が配置されています。コミュニティ交流員はローテーションを組み、4つの団地のフォローを行っています。

ーコミュニティの構築を阻む多層的な問題

下神白復興公営住宅の最大の特徴として、住民の大半が65歳以上の高齢者であることが挙げられます。もともとは家族と一緒に暮らしてきた方も多くいらっしゃいますが、若い世帯の多くは、復興公営住宅には入らず、市内に家を新築したり、あるいは通勤に便利な中心部の賃貸住宅などに暮らしているからです。このため、多くの皆さんが孤独感を抱えておられます。

被災者にとって身体的・精神的基盤が揺らぎ続ける中、地域社会の中では、復旧や復興への歩みを進める上で多領域にわたるイデオロギーの衝突や公平性についての議論、心ない風説の流布などが蔓延しました。それらは、住民のコミュニケーションに「タブー」となる領域を次々と形成していくことになり、対話の機会は失われ、さらに偏見や軋轢を助長することになりました。双葉郡から来たことを隠す住民も多く、精神的負担がさらに大きくなってしまっている状態が続いています。

福島芸術計画×ART SUPPORT TOHOKU-TOKYOは、このような背景を踏まえ、大規模なコミュニティ再編が予定されていた今年度、転居先でのスムーズなコミュニティ再構築と、多様な背景を持つ人々が互いの違いを理解・尊重し合い、安心して集える場を作ることができるようなコミュニティづくり事業を計画しました。それが「イトナミニティ」プロジェクトです。次項からは、プロジェクトについて詳しく紹介していきます。

Contents-1

「イトナミニティプロジェクト」事業振り返り

2015年度事業

イトナミニティプロジェクト

- | | | |
|---|----------------------------|----------|
| 1 | いわき七タプロジェクト | P24 ~ 37 |
| 2 | ちぎり絵屏風
～手で紡ぐコミュニティ～ | P38 ~ 51 |
| 3 | おでんプロジェクト
～食べて笑うコミュニティ～ | P54 ~ 67 |

イトナミニティとは「営む」を軸に「糸」と「意図」、そして「コミュニティ」という単語から連想して作られた造語です。今年度は、3つの大きなプロジェクトを「イトナミニティプロジェクト」として企画しました。このプロジェクトでは、手を動かすことで紡がれるコミュニティを作り続けていきます。参加者各々にとって「楽しい居場所」を見つけることができるような場作りをし、日常を営む人々が性別や世代、地縁や血縁、様々な背景を越え、興味や関心ごとで繋がることをテーマとしています。

福島県いわき市は被災者が被災者を受け入れている地域です。震災という経験を共有しつつも、各人が抱える背景や思いが大きく異なる人々と共生を図ることが求められる当地域は、コミュニティ課題の先進地であり集約地でもあります。つまり、高齢化社会が進む日本がこれから直面していく課題に、今、まさに直面している地域なのです。

イトナミニティプロジェクトはアートの力を借りて、この課題に正面から取り組んでいます。「楽しいから来てるんだよ」、「あなたの顔を見に来たよ」、「最近こんなことがあってさ」。ワークショップ（営み）には、ただただ雰囲気を楽しむに、お茶を飲み、お菓子を振る舞いに、本気で制作をするために、多くの人が集います。

その場は、様々な「糸」と「意図」が「営み」紡いでいく場。コミュニティという言葉に幻想を抱き続け踊らされている現代に対し、最も大切にすべきブリミティブな時を再形成している場。その場が、もしあなたの居場所になるのなら。そのきっかけとなることができるなら。紡ぎ続けることに協力できるなら。

2015年、イトナミニティプロジェクトが静かに始まりました。

いわき七夕プロジェクト

いわき七夕プロジェクトは、いわき市の復興公営住宅が抱える課題を共有する中で、その解消を目指すアートプロジェクトのスタートとして、福島県立博物館が事務局を務めるはま・なか・あいづ文化連携プロジェクトが主催し、福島芸術計画×ART SUPPORT TOHOKU-TOKYOや関係団体が協力し実施しました。下神白団地の住民が、アーティストの協力のもと、いわき市平地区の夏の風物詩「平七夕まつり」で飾られる熊手飾りを制作し、お祭りに展示しようというプロジェクトでした。

団地の集会所をアトリエとして使い、2ヶ月もの制作期間を経て完成した熊手には、それぞれ住民一人ひとりの趣味や特技、思いや願い、さらには懐かしい故郷の自慢のものが目一杯に詰め込まれました。熊手は、七夕祭りの笹飾りとして夏の夜空に舞い上がり、七夕飾りの美しさを競う審査でも「審査員特別賞」を受賞するなど、造形の美しさも評



開催時期：2015年5月～8月

アーティスト：とっくん（洗ざ知らズオーケストラ・美術）

主催：はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト実行委員会

協力：特定非営利活動法人3・11被災者を支援するいわき連絡協議会（みんぶく）

特定非営利活動法人 Wunder ground

助成：平成27年度文化庁地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業

価されました。熊手は、団地の住民たちの記念すべきモニュメントとして、来年以降も飾られることになっています。

そもそも、この下神白復興公営住宅を含む復興公営住宅でのアートプロジェクトの計画が立ち上げられたのは2014年にさかのぼります。翌年に入居が始まる復興公営住宅で「コミュニティの分断」という問題が懸念されており、コミュニティ再構築のためのプログラムが求められていたからです。

特に下神白団地の場合、通常、福島県内に建設される復興公営住宅は「1つの団地に1つの町」というスタイルの中、棟ごとに町は区別されるものの、複数の異なる町の住民が同じ団地に引っ越してくることから、出身の町の違いがコミュニティの分断を生んでしまうのではないかとという懸念が当初からありました。帰還困難区域となった町もあれば、帰還に向けた具体的な動きが始まっている町もあり、町によって復興の色合いも様々。賠償の違いや「戻る／戻らない」といった考えの違いなども複雑に絡み合い、コミュニティの分断をどう乗り越えていくか、福島県全体の問題にもなっていました。

団地に暮らす人たちの心の壁を少しずつ取り払い、コミュニティをいかに再構築するか。文化芸術の力で問題解決のためのきっかけを作ることではないか。そのような考えから、下神白復興公営住宅での1年間のアートプログラムを計画するに至りました。

住民の入居が始まったのは2015年1月。その後4月より、プロジェクトチームがリサーチを始めました。やがて福島芸術計画×ART SUPPORT TOHOKU-TOKYOと同様に2012年から文化による福島の復興と発信を目的に活動しているはま・なか・あいづ文化連携プロジェクトとその協力団体でもあるNPO法人ワンダーグラウンド、福島芸術計画×ART SUPPORT TOHOKU-TOKYOが協働する中で、下神白団地でのアートプロジェクトの可能性が探られるようになりました。NPO法人ワンダーグラウンドのコミュニティコーディネーターの会田勝康から、いわき市平で8月に開催される「平七タまつり」を素材とすることが提案され、アーティストのつくくん、コーディネーターの会田勝康が、すでに団地のコミュニティ支援で入っていた「みんぶく」の



コミュニティ交流員の皆さんの協力を得ながら、作品の前身、制作の進め方、展示の方法などについて住民たちと話し合い、とっくんの発案で、熊手飾りを作って七夕祭りで飾ろうという計画が決まりました。

リサーチを進める中でわかったのが、住民たちの多様な特技や趣味でした。クラフト作品、竹細工、流木アートに切り絵など。住民たちと交流するうちに心打ち解け、家に遊びに行ったり、作品を見せられたりするなかで、住民たちが想像以上に多くの特技を持っていることを知ったのです。「せっかく皆さんに得意なものがあるのだから、それを持ち寄って、それが最終的に1つの作品になり、なおかつ地域の皆さんに認められるものができるのではないか」。とっくんはそう考えたと言います。

そこでとっくんが提案したのが「熊手」でした。熊手は福や運を集める縁起物。その熊手と同じように、住民たちの故郷のシンボルや、思いや願いを集め、縁起物としてお祭りに展示しようというわけです。制作する過程で住民の間の交流が促進され、コミュニケーションが盛んになれば、心の境界線が自然に薄れ、団地の住民の間にコミュニティが再構築されるのではないかと考えたのです。七夕祭りという地域のお祭りに参加することで、いわき市のもともとの住民との交流にもなります。まさに熊手は、コミュニティの再構築にうってつけの素材でした。



人を紡ぐアートプログラム
いわき七夕プロジェクト

人を紡ぐアートプログラム
いわき七夕プロジェクト

毎週月曜から木曜まで集会所が開放され、約2ヶ月間にわたって熊手が制作されました。1号棟から6号棟まである団地の住民が町の垣根を払って交流するのは、実はこのプロジェクトが初めてでした。そのためか、事業が始まった当初は、同じ町の住民で固まることが多く、異なる町の住民の間での交流はなかなか見られませんでした。

しかし、回を重ねるにつれ、徐々に日常的な会話が生まれ、住民同士が名前前で呼び合う環境が自然にでき、和やかな雰囲気が始まりました。アーティストやコーディネーターは毎日に参加できないものの、みんなのコミュニケーション交流員が毎日住民と顔を合わせることにになり、強い信頼関係を築くことができました。その結果、参加住民から他の住民の心身の状態をこまめに教えてもらったり、住民が率先して家の様子を見に行ってくれたり、自主的な動きが見られるようになりました。

でき上がった熊手には、住民の皆さんが暮らしていた双葉郡内の町のシンボルがいくつも隠されているだけでなく、それらパーツ一つひとつが、住民の皆さんの特技を持ち寄って作られています。双葉郡の多様な文化と、そこに暮らしてきた人の物語、団地に暮らす人たちの協力、そして、一緒に七夕

祭りを作り上げるいわきの人たちとの団結。1本の熊手には、それだけ多くの要素が凝縮されているのです。

「五穀豊穡の米俵」は、ペーパークラフトが得意な方たちが協力して作成しました。米俵には、南天の木（難を転ずるという縁起物）に乗せられた9匹の「猿ぼぼ」が乗ります。この「猿ぼぼ」も、裁縫が得意な方が率先して先生役となり、住民みんなで作成したものです。切り絵が得意な方が作った「絵灯籠」は、繊細な造形に注目。双葉郡の春の風物詩である「夜ノ森の桜」はトイレットペーパーの芯で作られています。さらには、双葉町の名所「双葉バラ園」のバラをイメージした造形や、大熊町のキャラクター「おーちゃん」と「くーちゃん」をモチーフにした「くまろちゃん」も加わりました。浪江町の請戸川のシンボル「鮭」や「大堀相馬焼」も見どころです。

アーティストのつくくんは、制作自体はほとんど住民に任せ、これらの作品が造形としても美しくなるよう全体のディレクションに腐心。見事に1つの作品にまとめあげました。「アーティストは作品を作るのではなく、きっかけに過ぎないと考えています。先生役にならないよう、対等な関係を作っていくことに注力しました」と、つくくんは語っています。

そして、七夕初日の8月6日。いよいよお祭りの日。車がない、足が悪い



人を紡ぐアートプログラム
いわき七夕プロジェクト

などの理由で平の七夕祭りを見に行くことができない住民のために、みんながバスを2台チャーターし、総勢50名での「七夕バスツアー」を開催しました。50人もの住民が、町の垣根を超えて集まり、バスに乗って飾りを見たいと思ってくれたこと自体、私たちの想像を超えることでした。作品は、いわき駅そばの通りに堂々と展示され、中には涙を流しながら展示を喜ぶ方もいました。

コーディネートする会田は、平地区の商店会にも所属しており、「団地の皆さんが七夕飾りを作ってくれることは商店会にとってもメリットがあり、大変な状況に置かれている人に対する『支援』というより、むしろ対等な立場で祭りを盛り上げるために動けたのがよかった」と当時を振り返ります。会田もまた、住民との信頼関係に奔走した1人です。

1年にわたって行われるアートプログラムのとっかかりとなるプロジェクトであり、住民との信頼関係構築が最大の焦点だった七夕プロジェクトは、こうして大成功に終わることができました。

一方、参加者が固定され、男性の参加者が少なかったことは、反省点として挙げられます。参加しなかった住民、特に男性をいかに巻き込み、団地全体のコミュニティを再構築していくか。この問題意識は、下半期のプロジェクトに繋がっていきます。

人を紡ぐアートプログラム
いわき七夕プロジェクト





平成29年
おめでとう!!

ちぎり絵屏風

～手で紡ぐコミュニティ～

大成功に終わった七夕プロジェクトから1ヶ月あまり。下半期の事業の第1弾として開催されたのが「ちぎり絵屏風～手で紡ぐコミュニティ～」です。復興公営住宅のあるいわき市小名浜地区の風景や風物詩などをモチーフにちぎり絵を作り、それを市内のアート展に出展しようというプロジェクトです。七夕プロジェクトで作り上げられた信頼関係をゼロに戻さないように、スタッフは引き続き同じ陣容で進め、アーティストも、前回に引き続きいてとつくんにお願いをしました。

七夕プロジェクトで得られた反省点（参加者が固定され、男性の参加者が少なかったこと）を、より改善していくことが下半期のプロジェクトには求められました。このため、今回は「参加の間口を広げること」、「たくさんの住民に参加してもらうこと」を

目標に掲げてプロジェクトを始動させました。「手で紡ぐコミュニティ」と副題を付けたのは、七夕プロジェクトで皆さんにして頂いた「手作業」が、コミュニティ構築のために欠かせないという感触を得ていたから。みんな

で手を動かし、その手作業を通じてコミュニケーションが生まれ、最後に1つの作品として完成されていくプロセスの中で一体感が醸成されていく。手作業は、その出発点だと考えました。

前回の七夕のプロジェクトの題材になったのは、団地の住民の皆さんが震災前に住んでいた双葉郡内のそれぞれの故郷でしたが、今回は、今自分たちが住んでいるいわき



開催時期：2015年9月

アーティスト：とつくん（渋さ知らズオーケストラ・美術）

主催：福島県、東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）

特定非営利活動法人 Wunder ground

協力：特定非営利活動法人 3・11被災者を支援するいわき連絡協議会（みんぶく）

市、あるいは小名浜地区を題材に作品を作ります。今現在の状況を肯定的に捉えながら、移住先のいわき市民との接点を作れるのではないかと、そんな狙いがありました。そこで、住民の皆さんには、まず町歩きをしてもらい、お気に入りの風景や、いわきを象徴するようなものを写真に収めて来てもらったうえで、それらの写真の中から、アーティストのつくくんが屏風絵に使うモチーフを厳選。数回にわたる住民との集会で写真を1枚1枚吟味しながら、どの題材を屏風絵に入れていくかを一緒に考えました。

アーティストのつくくんがこのプロジェクトで「ちぎり絵」という手法を選んだのには理由がありました。「参加者全員で参加でき、なおかつ個々人の上手下手がわかりにくいから」です。七夕では、切り絵やクラフトが上手な人にリーダーになってもらい作業を進めましたが、それが上手にできない人は、どうしても作品作りに入りにくかったという反省点を踏まえたものです。

ちぎり絵の作業工程の中でもっとも簡単なのは、「紙をちぎって紙片を作ること」です。これなら高齢の住民でも参加でき、しかも絵が完成した後も「自分が関わった」という達成感を得るこ



人を紡ぐアートプログラム
ちぎり絵屏風 ～手で紡ぐコミュニティ～

人を紡ぐアートプログラム
ちぎり絵屏風 ～手で紡ぐコミュニティ～

とができます。それぞれが「1枚の屏風絵を作る」のではなく、1枚の屏風絵を作るための作業を「ちぎる」、「貼る」というように細分化することで、必ず何かしらの工程に関わることができるような仕組みを考えたいわけです。この細分化がうまくいったことで、作業場に前回よりも多くの方たちに集まってもらうことができました。

さて、屏風絵に取り入れるモチーフが決まり、ラフ案ができると、そのラフ案に合うように、ちぎり絵の素材になる小さな紙片を皆さんに作ってもらい、その絵を貼っていく工程に入ります。ここでも一工夫。雑誌や古新聞を紙片に使ってもらうことにしたのです。言い換えれば「あえて便利にしない」ということ。初めから美しい和紙や折り紙を素材にすると、単純にそれを切り刻んで紙片にするだけです。雑誌や新聞から紙片を作ると、その雑誌や新聞から題材を選ぶという工程が増えます。何を選び、それをどうちぎるか。そこですでに創造性が必要とされます。この桜の写真はこうちぎったらきれいになるかな、この船は絵の中のどこに入れたらいいかな、そういう想像が「ちぎる」という行為に

含まれることで、より「自分が関わった」という達成感が得られました。また、地元の新聞を使うことで、新聞をちぎる行為の中にも、様々なおしゃべりが発生するという副次的効果も。

前回の七夕プロジェクトでは、作業に没頭しすぎる方もいらっしやう、あまり会話が生まれない日も少なくありませんでした。そこで今回は、コミュニケーションが多く発生する気軽な作業をできるだけ入れ込むようにしたのです。

また、さらに多くの住民に来てもらうために「作業をしなくても集まってい」ということを周知。ここでは、みんなのコミュニケーション交流員の皆さんに多大なご協力を頂きました。個別に声をかけて頂いたり、張り紙で案内をして頂いたり、日常の細かな声かけによって、住民たちに広く集会所の様子が伝わり、



「作品を作らない人でも来ていい」、「誰が行っても拒否されない」、そういう空気を作られたように思います。集会所での制作は、「アートプロジェクト」ではなく「みんなでわいわい集まる日」として認知されていきました。

多くの人が集まることで、より日常的な会話が生まれ、紙をちぎる人、貼り付ける人だけではなく、お茶を入れる人やおしゃべりに興じる人までもが当事者となって作品の一部になっていく雰囲気が生まりました。団地に引きこもりがちだった高齢の住民も集会所に集まったのも、「なんだか楽しそうだな」という雰囲気が出たからでしょう。

1ヶ月にわたる制作期間を経て、ついに作品が完成。今回は、いわき市平で開催されたアート展「玄玄天」への出品です。国内の芸術家の作品と肩を並べるように、団地の皆さんが作った屏風絵が展示されました。屏風絵の中には、小名浜の美しい海、かもめや塩屋崎の灯台など、いわきの風物詩が描かれていました。この玄玄天にも、団地からバスに乗り、住民みんなで作品を見に行っています。

前回同様、展覧会というゴールを明確に設定できたことで、参加者の住民のモチベーションも上がり、展示が近づくほどに一体感が出てきました。集会所がコミュニティスペースとして機能し、そこから新たな人間関係が構築される雰囲気は日に日に色濃くなり、住民の皆さんのほうから「今日はあの人に来てないからちよつと部屋に行つて様子を見てくる」といった自主的な動きが生まれたほです。

改めてこのプロジェクトを振り返ると、制作過程には「いったんバラバラにしてから1つに再構築する」というコンセプトが通底しています。この「バラバラになったものを再構築する」という感覚は、今、団地の住民の皆さんが置かれている状況を暗喩しています。いったんバラバラにはなってしまったけれども、ここからまた新しいコミュニティを作っていける、バラバラになったものを整理して再出発できるということを、無意識に感じて頂けたのではないのでしょうか。

そして、改めて、「作品を作ること」よりも「作品を作る過程」にこそ、コミュニティ構築の鍵が隠されているのだと思います。



人を紡ぐアートプログラム
ちぎり絵屏風 ～手で紡ぐコミュニティ～

アーティスト、コーディネーター、みんなのコミュニティ支援員の皆さん、それぞれが役割を分担しながら住民との信頼関係構築を担い、制作過程の中でコミュニケーションの純度を高めていく。そのスタイルが改めて確立されたプロジェクトになりました。住民とのコミュニケーションだけでなく、コミュニティ支援員との連携も強まり、三位一体となった信頼関係構築の体制ができ上がってきたように思います。

人を紡ぐアートプログラム
ちぎり絵屏風 ～手で紡ぐコミュニティ～







おでんプロジェクト

～食べて笑うコミュニティ～



今年度事業の締めくくりとなる最後のプロジェクトが、この「おでんプロジェクト」。3月3日に「ひなおでん祭り」を開催し、団地の皆さんにおでんを振る舞おうというプロジェクトです。当日に食べるおでんはもちろん、おでんを振る舞う「屋台」も、団地の皆さん自身が考案・制作するというDIYを前面に押し出したプロジェクトとなりました。

イベント当日は、天候にも恵まれ、おでんを食べるにはちょうどいい気温となりました。事前に集会所で告知をしていたこともあり、当日は100名近い住民が来場。おしゃべりをしながらおでんを頬張る人もいれば、ベンチに腰掛けて黙々と食べる人もいて、団地中に笑顔が広がっていました。これにより、2015年

度の事業は完結。目標としていた団地住民のコミュニティの再構築、そして住民たちの自立のための足掛かりを作ることができたのではないかと考えています。



おでんの具材は、大根、昆布、厚揚げ、がんも、白滝、ごぼうまきの6品。かつおベースのダシの効いたスープが素材の美味しさを引き出してくれました。特に大根は前日から入念に煮込んだものを使ったため、味がよく染み、素材の甘さとともに身体の中に染み渡ってくるようでした。おでんの匂いと楽しそうな雰囲気誘われてか、普段は部屋の中に閉じこもり気味だった方も外に出ておでんを召し上がってくれました。前半2つの

開催時期：2015年9月

アーティスト：とっくん（渋谷区スズオーケストラ・美術）

主催：福島県、東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）

特定非営利活動法人 Wunder ground

協力：特定非営利活動法人3・11被災者を支援するいわき連絡協議会（みんぶく）



プロジェクトとは違って、団地内で完結するお祭りだけに、以前よりも団地の住民の顔の見えるプロジェクトになりました。

本格的な屋台も想像以上に完成度が高く、そのまま繁華街に繰り出しても違和感のないものになりました。これは、大工仕事が得意な方が率先して制作に関わってくれたおかげです。資材は市内のホームセンターなどで確保したのですが、電気ドライバーなどの工具は仕事で使うプロ仕様のものを持ち込んで、本業さながらにお手伝いして下さった方もいました。「住民がそれぞれ得意なことに関わる」という基本的なスタイルは1年を通じて貫かれました。

おでんプロジェクトが計画された背景には、男性がなかなか集会所に来てくれないという問題がありました。前半の2つのプロジェクトが、どちらかといえば女性が得意とする「手作業」に依拠する制作スタイルだったため、男性の参加者が伸び悩んでいたのです。また、男性のほうが女性よりも孤立しやすいという傾向

は、阪神淡路大震災などでも見られており、男性をいかに集会所に集めるかということは、団地全体の喫緊の課題でもありました。そこで、男性の得意とするDIYの手法を取り入れ、屋台を自主制作することにしたわけです。その狙いが、うまく的中しました。

実は、おでんプロジェクトが始まる前に、みんぶくの主催で「ベンチ制作ワークショップ」が数回に分けて行われていました。そのおかげで、事前に大工仕事が得意な方の目星をつけることができ、また、集会所全体に「おでんに向けて一仕事がんばろう」という空気が生まれ始めていました。このため打ち合わせ当初から議論が活発化。屋台をどのような造形にするかなど、大変盛り上がりました。資材の調達、制作スケジュールなども住民の皆さんが自主的に判断して進めてくれるようになり、コーディネーターやアーティストの仕事といえば「議論の方向性がずれたときに軌道修正すること」くらい。非常に良好な関係性が築かれました。また、料理としてのおでんをどのように振る舞うかについても、女性を中心に綿密な打ち合わせが重ねられ、味付けや具材などが決められていきました。

このように、今回のおでんプロジェクトでは、住民自らがお祭りを企画し、運営するということが大きなポイントになっています。それが、前半2回のワークショップ型作品とは大きく異なるところです。お祭り当日にどのようなスタイルで振る舞い、どんな食材を使ってどのように味付けをするのか、あるいは屋台はどのような大きさにして、どのようなスケジュールで制作するのか。それらすべてを住民たちが自ら考え、そして自ら決めるという「自己決定型」のプロジェクトになっているのです。

一見すると「おでんを振る舞う」こと自体には芸術性を感じられないかもしれません。しかし、前半に行われた七夕プロジェクト、ちぎり絵屏風プロジェクトで得られた知見や経験、あるいは反省点なども踏まえたうえで綿密に作り込まれています。また、制作過程や合意形成のプロセスなどには、アートプロジェクトのマネジメントに関わるエッセンスが多層的に練り込まれており、今年度最後のアートプロジェクトとして相応しいものになったと考えています。本書の中盤で紹介されている10の提言が、この

プロジェクトに凝縮していると言っているかもしれません。

なぜ「おでん」になったのか。それは、おでんが「対話」や「合意形成」の場を作る、大変興味深い料理だからです。味付け一つとってもそうで、関西風か関東風か、あるいは味噌か、ダシは何で取るのかなど、味付けだけで、住民一人ひとりの食文化、すなわち個性に向き合わなければなりません。それを否定することなく、同時に自分も主張しながら、いかに合意を取り付け、形にしていくのかが問われます。味付けが終わっても、食材選びでまたその壁に当たることになります。「イベントでおでんを振る舞う」と書くとは簡単そうに聞こえますが、個がぶつかり合う対話と合意形成の連続で、その1杯ができていくわけです。

全国に「ご当地おでん」があるように、おでんに使われる食材には地域性が現れます。どんな具材を入れていたのか、どの野菜がおいしかったか、どんな生産者がいて、どんな産物があったのか。たった1つの野菜から会話が生まれ、地域の話になっていきます。そしてまた、その食文化を通して、それぞれの住民同士



が、それぞれの人生や価値観に触れていくことになる。おでんとは「対話の食べ物」かもしれません。

実は、今回のおでんプロジェクトの隠れたテーマが「自立への足掛かりを作る」ということでした。アーティストやコーディネーターがいなくても、自分たちでイベントを企画し、自分たちで集会所を楽しい場所にしていくようなノウハウを知ってもらいたいと考えました。ですから、今回

住民が自ら決め、行動し、支え合いながらこの団地を盛り立てていく。団地を「地域」に置き換えてもよいでしょう。私たちは、2015年の3つの事業を通じ、「交流と自治」をここに根付かせようと考えました。根付くところまではいかなくとも、足掛かりは作りたい。おでんプロジェクトでの皆さんの表情、動き、思いに触れる限り、その当初の目的は果たせたのではないかと考えています。

このプロジェクトでは、あえて手伝わない、あえて意見を言わない、あえて足りない状況を作る、といったことも意識しました。あえて問題を作ることで住民同士の問題解決力が高まり、自立性が促進されるからです。本書でも収録されている、みんぷくの天野和彦さんが講演で語られた「交流と自治」の考えにも添うものです。前半2つのアートプロジェクトが「交流」に重きを置いたのに対し、このおでんプロジェクトは「自治」のほうに目を向けた、と言っているかもしれません。







マナビバ。

「アートとコミュニティの出会い」

昨年度から不定期で開催されている「マナビバ。」は、震災がもたらした地域の課題と解決策を、文化・芸術・アートの視点から探り、福島について学び、考え、話し合う場として開催されている勉強会です。今年度の「マナビバ。」では、アーツカウンシル東京のプログラムオフィサーである佐藤李青さんを講師に迎え、他県での取り組みなどを紹介頂きながら、アートプロジェクトがもたらす効能、そして福島で今必要とされるアートプロジェクトについてお話を伺いました。



開催時期：2015年12月7日

講師：佐藤李青さん（アーツカウンシル東京）

主催：福島県、東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）
特定非営利活動法人 Wunder ground

協力：特定非営利活動法人 3・11被災者を支援するいわき連絡協議会（みんぶく）
はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト実行委員会

人を結ぐアートプログラム
マナビバ。～アートとコミュニティの出会い～

今回特徴的だったのが、いわき市内でアートプロジェクトを企画しているような方だけではなく、今年度事業の実施場所である、下神白復興公営住宅でコミュニティ支援を行っている「みんぷく」の皆さんにも出席頂いたこと。アートプロジェクトとコミュニティの関わりについて、更なる学びの場になればとご出席頂きました。この勉強会が、今年度の事業にも活かされたものと考えています。

佐藤さんからのお話で特に重点が置かれたのが、アートプロジェクトの「場」の重要性。佐藤さんは、焚き火によって人の集まる場を作る彫刻家や、野点をやることで場を作るアーティストなどを紹介しつつ、「与えられた公の場ではなく、自分たちで共に場を作るのが大事だ」と語ります。そこで、時間はかかるけれども、地域の方々との会話が生まれ、住民一人ひとりを固有名詞の「○○さん」と呼べる関係になる。人が集まる場ができれば、そこにコミュニケーションが生まれます。

また、アーティストの北澤潤さんが福島県新地町で手掛けた「マイトウンマーケット」についてもご紹介下さいました。ここでは、

アーティストが「作品を作る」のではなく、仕組みを設計することとに徹することの重要性が語られました。このプロジェクトでは、北澤さんは最後までプロジェクトの一員として関わりつつも、タウンの運営や店づくりが地元住民に引き継がれるよう工夫したそうです。北澤さんが最後まですべて関わるようなスタイルになっ

てしまっていたら、自立から遠ざかることになってしまいます。

佐藤さんのお話を伺い、改めて、皆が一緒に場を作ることの重要性を感じました。「先生―生徒」という従属的な関係ではなく、皆が当事者として関わる。そのような場を設計することが、コミュニティでのアートプロジェクトに求められることなのでしょう。アートプロジェクトにおいては、作品を作ることよりも、作られる「プロセス」にこそ本質的な意味があるということを、自分たちなりに咀嚼しながら学ぶことができました。

参加者にも大変刺激になったようで、皆さん熱心にメモを取り、「これからの活動に活かしたい」と、今後の抱負を語っていらっしやいました。この「マナビバ。」で得られた学びが、そのまま今年度



の3つのプロジェクトには活かされています。現場を走り回るだけでなく、こうして学び吸収できる時間を作ることも、地域の文化芸術には欠かすことができません。

人を紡ぐアートプログラム
マナビバ。～アートとコミュニティの出会い～

人を紡ぐアートプログラム
マナビバ。～アートとコミュニティの出会い～

Contents-2

被災地いわきからの10の提言

ここでは、今年度開催されたアートプロジェクトで得られた知見や収穫を「提言」としてまとめています。被災地いわきは「課題先進地区」と呼ばれるように、いわきで直面する問題は、やがてどこかの地方が直面することになると考えられています。ならば、私たちが問題解決のために取り組んできたこと、あるいはそこで得られた知見を、他県でも応用可能なものとして記録しておくことが、先進地区に暮らす私たちの役割なのではないか。そのような思いから、あえてここに「提言」としてまとめてみました。

提言 1 コミュニケーターとコーディネーターが鍵

提言 2 アーティストはコミュニケーションのきっかけを作る

提言 3 住民との信頼関係を作る

提言 4 アートで日常を作る

提言 5 母ちゃんたちには手作業でコミット

提言 6 父ちゃんたちにはDIYでコミット

提言 7 食は土地と人を結びつける

提言 8 作業を細分化する

提言 9 否定せずに受け止める

提言 10 ゴールを作る

コミュニケーターとコーディネーターが鍵



今年度に行われた3つのプロジェクトは、一般的に想定されるような、例えば市民が美術館などの会場に自主的に集まってくるようなプロジェクトとは性格が全く異なります。被災者の暮らす復興住宅で行われるという点、参加される住民の皆さんが未曾有の災害に見舞われ、癒し難い心の傷を負っているという点、また、団地の住民間に、震災前に暮らしていた「町」に由来する線引きが強固に存在し、コミュニティが断絶している点、これら複数の点で、既存のアートプロジェクトとは全く違うアプローチが求められていました。

そんな中、今年度開催された3つのプロジェクトが大きなトラブルなく終了できたのは、復興公営住宅のコミュニティ支援で団地に入っていた「みんぷく」のコミュニティ交流員の存在があったからこそです。みんぷくのコミュニティ交流員の皆さんは、住民が日常的に利用する集会所の運営を任されており、どのような住民がそこで生活を送っているか、住民に対してどのように接すればいいのかについて、多くの情報と経験を持っています。このため私たちも、みんぷくの皆さんとの意見交換・情報交換を通じて、住民が直面する問題や住民の特性、あるいは生活スタイルなどをあらかじめ共有することができました。みんぷくの皆さんがいなければ、今回のプロジェクトは実現できませんでした。

みんなの皆さんが、なぜこのような大きな役割を果たしたのかと言えば、みんなのコミュニケーション交流員の皆さんが「コミュニケーション」としての役割を果たしてくれたからだと考えています。住民に密接に関わり、日常的なコミュニケーションを促すという意味でのコミュニケーションであるだけでなく、アーティストと住民、あるいはコーディネーターと住民の間のコミュニケーションを円滑にする役割も果たして頂きました。

アーティストやコーディネーターは、常にそこで作業するというわけにはいきません。アーティストのつくくんは週に1度程度、集会所に来て制作の方向づけをし、様々な差配をしたら戻ってしまいます。日常的に作品を作っていくうえでも、やはりコミュニケーションの存在は欠かすことはできませんでした。裏を返せば、高齢者を対象にしたアートプロジェクトや、高齢者の集住する団地、あるいは何らかの災害で被災した住民を相手にするようなアートプロジェクトを行う場合、みんなの交流員のような「コミュニケーション」の存在が欠かすことができないということです。

また、今回、コーディネーターを務めたNPO法人ワンダーグラウンドの会田勝康の存在も欠かせません。みんなの支援員は、集会所の運営に特化した業務を行っているため、必ずしもアートの手法を深く理解しているわけではありませんし、団地周辺の地域住民との繋がりがあるわけではありません。今回のアートプロジェクトでは、「団地内の住民コミュニティ」だけでなく、団地のある地域、つまり「いわき市民とのコミュニティを構築する」必要がありました。あとの提言でも詳しく説明しますが、地域社会と交流できるかどうか、住民の皆さんの達成感や自己肯定感に深く関わってきます。その意味で、いわき市平地区の商店会に所属している会田のような地域人材が「コーディネーター」として関わったことで、住民とアートの距離、住民といわき市民の距離が縮まり、プロジェクトの成功につながったと分析しています。

分断されたコミュニティを回復することを目指すような、つまり今回のようなアートプロジェクトを進める場合、住民とアーティストだけでは、地域に根ざした日常的な展開ができません。コミュニケーション、コーディネーターの存在があつて初めて、プロジェクトが日常生活の中で進行し、だからこそ地域に根付いていくのです。まずはそのことを、この提言1で皆さんと共有しておきたいと思います。

2

アーティストはコミュニケーションのきっかけを作る



提言2は、アートプロジェクトにおけるアーティストの役割について。アーティストというと「自分の作品」を制作することを常に求められますが、今回のプロジェクトでは、重要なのは結果よりもむしろプロセス。作品を作る過程でコミュニケーションの機会が生まれ、住民の心が癒され、自立に向かっていけるような端緒を築く。それが、アーティストに求められる役割です。

もちろん、住民とコミュニケーションしなくてもよいというわけではなく、むしろ、住民とは絶妙な距離感を保ったうえで、積極的にコミュニケーションを図ることが求められます。住民との信頼関係が築かれていなければ、アーティストがどれだけの確な指示を出したとしても住民は動いてくれません。しかし、ワークショップなどで陥りがちな「アーティスト＝先生」という構図になってしまうと、住民は「生徒」として受動的な立場になってしまい、指示がなければ動けなくなってしまうです。ここで重要なのは「自立」を見据えたコミュニケーションということでしょう。

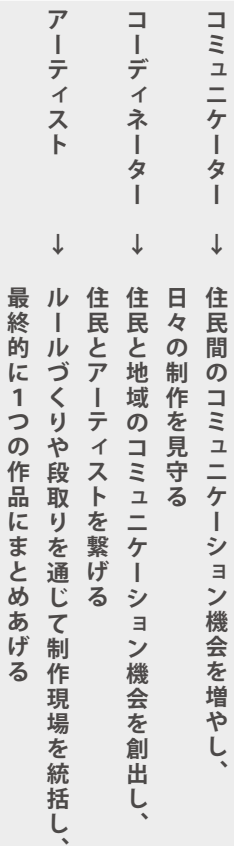
今回関わってもらったアーティストのつくくんは、今年度のプロジェクトでアーティストに求められる役割について、次のように話しています。

「確固たる自分が作品を作って、アーティストが前に行くのではなくみんなで作ることが一番。最後の最後で手を加え、作品の完成度を上げることがアーティストとしての最低限の仕事です。それだけでなく、住民の皆さんに自立の芽を植えつけるような環境を作るのが役割だと思っています。いずれ、アーティストがいなくなっても、住民の皆さんが自分たちでやり、自分たちで考え、自分たちで持続させていく環境を作る。つまり、アーティストは「きつかけ」にすぎないんだと思います。」

とつくくんは、これまで全国各地で老若男女様々な人を交えた「ワークショップ」形式のアートプロジェクトに数多く関わってきており、一般の人たちと一緒に作品制作を進めるためのノウハウを持っていました。また、性格的にも、自ら進んで住民とコミュニケーションが取れるようなアーティストだったため、住民から受け入れられ、多くの方が「とつくくんが頑張ってくれたから自分も頑張れた」という主旨のコメントをして下さっています。住民と飲み会をしたとき、酔っぱらって寝てしまったとつくくんの顔が落書きされてしまったことがあります。そんなエピソードからも、とつくくんが、いかに住民に信頼されていたかを伺い知ることができるでしょう。

提言1では、コミュニケーターとコーディネーターの必要性について取

り上げましたが、その二者にアーティストを加えた三者が、それぞれの役割を理解した上で連携していく。そのことが、これからのアートプロジェクトに求められていくと考えています。



地域に根ざし、複雑に絡み合った問題と向き合いながらコミュニティを再構築していくためには、コミュニケーター、コーディネーター、アーティスト、この三者の三位一体の連携が欠かせません。

住民との信頼関係を作る



アートプロジェクトに関わらず何事もそうですが、何らかの取り組みの参加主体がその地域に暮らす住民である場合、住民との信頼関係の醸成は、プロジェクトを完遂するための「前提条件」と言ってもいいくらいに必要なものです。特に、プロジェクトが走り出す時期は、住民側も「受け身」の状態であることが多く、こちらから何かを頼んだうで動いて頂くことが増えます。信頼関係ができていなければ、こちらの提案にも耳を傾けてはくれませんし、協力してもらえません。

震災後、福島県内では様々なアートプロジェクトが行われてきました。住民が快く作品を残せたものがあつた一方で、作り手側のコンセプトに地域住民を無理矢理はめ込み、半ば住民を利用するような形で作品が作られたものも少なくありません。そうしたプロジェクトは、作品に力が生まれないばかりか、地域住民のコミュニティの分断をさらに強めることにもなりかねません。

提言2にもあるように、アーティストの作品のために被災者を利用するのではなく、対等な関係で問題解決に取り組む姿勢や、作品を作る前に住民と信頼関係を築こうというアプローチが重要です。被災者を利用しようとしているのか、住民の皆さんは見抜いてらっしゃると思います。

まず私たちが目指したのは、みんなの皆さんとの関係構築でした。住民の中に入る前に、住民のケアを行うみんなの皆さんにお話を伺うことで、住民が抱える問題を理解し、団地で活動していくために必要な基本的な知識とマナーを学ばせてもらうことが必要だと考えたからです。特に、初回の「七夕プロジェクト」は、年間事業の最初の企画であり、この導入部分を間違えばその後のプロジェクトを進めるのが難しくなると考えました。このため、住民との関係構築以前に、みんなの皆さんとの関係づくりを優先して行なったわけです。

住民の皆さんに対しては、安易な言い方になりますが「真剣に説明する」ということを徹底しました。「アート」という言葉を出した瞬間に、どこか胡散臭く思われてしまうのは仕方ないことです。しかし、なぜ今このプロジェクトが必要なのか、自分たちに何ができて、住民の方にはどんなことを期待していて、その結果どのようなメリットがもたらされるのか、真剣に語る必要があります。そこで重要なのは対等な関係性です。上から目線で「大変な人たちに施しをしてやる」というのも、「社会実験がしたい」というのでもなく、お互いの強みを活かして、問題を解決するためにこう動いていけるのではないか、という提案を対等な立

場から出さなければなりません。

その点で、コーディネーターの会田勝康が、七夕祭りの行われる平地区の商店会の人間の立場から、団地の住民の皆さんにお話しできたことは幸運でした。「祭りを盛り上げるために双葉の皆さんと一緒に作品を作りたい」という当事者からの働きかけが、住民の皆さんの心を動かしたのだと思います。

普段の制作現場においても、できるだけ住民の顔と名前を覚える、方で話してみる、積極的に会話に混ざるといった、高齢者とのコミュニケーションの基本を抑える必要があるように感じました。場合によっては、ご自宅に伺っておしゃべりをしたり食事を頂いたりすることもありました。住民側へ飛び込んでいく、住民の皆さんと仲良くなろうとする、そういう前向きな姿勢を心掛けるようにしました。また、震災や原発事故に関する質問はあえてこちらから振らないなどの配慮も必要かもしれません。住民の性格や人間関係、行動傾向などもみんなの皆さんと話し合い、普段から情報を共有できたおかげで、住民の皆さんとの良好な関係を築くことができました。

アートで日常を作る



アートで日常を作る。これは、住民の日常生活の中で作品を作るということです。コミュニティアートの分野では、体育館などに大勢の人たちを集めて、例えば週末の2日間だけで作品を作るということもよくありますが、今回のプロジェクトでは制作期間に最低1ヶ月以上の時間を取りました。制作場所である集会所も、月曜日から木曜日まで一定時間開け放つ予定だったため、その間、好きな時に制作ができるように対応をお願いしました。

月曜日から木曜日とすることで、ほぼ毎日顔を合わせる住民が増えます。毎日顔を合わせると、住民同士、顔と名前を覚えやすくなります。実はそれを促すべく、住民の皆さんに、出身の町ごとに色分けしたカードに自分の名前を書いてもらい、集会所で作業するときには、その名札を下げてもらうことにしていました。これはみんなぐくさんのアイデアでしたが、「知らない人もどこの町の出身かが分かり、共通の話題が見つけやすくなる」と大変好評でした。

コミュニケーションの基本は、名前と顔を覚え、お話しすること。皆さん、町ごとに棟が分けられています。もともとは隣町同士。よく通ったスーパースタンドのことや、喫茶店や洋品店など、共通する話題をた

くさんお持ちです。「昔はどこそこ買い物に行ったのよ」なんて昔話をしているうちに、少しずつ打ち解け、見えない壁が取り除かれていきます。すると、やがて住民同士「知らない関係」ではなく「顔見知り」になり、何度も集会所で顔を合わせるうちに「お茶のみ友だち」になっていく。こうしてゆるやかにコミュニティが再生されていくさまが、集会所ではよく見られました。

毎日顔を合わせるので、誰かが来ないとその方が心配になります。「何かあったのかしら」と心配し合い、「○○さんが今日は来てないから家を見てくる」といった自主的な動きにも繋がりました。もともとは「集会所だけ」の人間関係だったのが、集会所を飛び出し、集会所の外の日常の暮らしの中にも、繋がりがどんどん膨らんでいきます。例えば誰かの家に集まってお茶を飲んだり、一緒に買い物に行ったり。アートプロジェクトで生まれた人間関係が、より日常化されていくわけです。

印象的だったのは、皆さんが毎日顔を合わせるようになってから、「最近○○さんがずっと死にたいと言っているんだ」と、住民の方同士で気遣い、励まし合おうという空気が生まれたことです。精神的に

苦しい立場に置かれている方は、なかなか家を出てこず、引きこもってしまいがち。このため、みんなのスタッフだけでは、なかなかケアが行き届きませんでした。しかし、こうして住民の皆さんが互いに気を配ったおかげで、最優先してケアすべき方の早期発見を促し、自殺や孤独死を防ぐことに繋がりました。今まではなかなか見えてこなかった住民のホッネや精神状態が見えるようになってきたのです。これはやはり「毎日顔を合わせる」ことによる効能と言えるでしょう。

アートプロジェクトによって、日常の中にアートが埋め込まれ、顔を合わせるだけでなく、何かに没頭したり、一緒に作品を作ることによって生まれる一体感が、断絶していた住民のコミュニティに血を通わせ、互いに反目するのではなく、互いに気をかけ合える関係に繋がりました。一気に制作するのではなく、毎日少しずつ、自分のできる範囲で。これが、アートプロジェクトの成功を占う重要な鍵になるのではないのでしょうか。毎日少しずつ時間をかけるからこそ、切れにくい絆になっていくのだと思います。

母ちゃんたちには手作業でコミット



下神白復興公営住宅の住民に限った話ではありませんが、お母さんたちは何かと手作業が好き。手作業と家事が切り離せない関係だからかもしれません。特に年配の女性は「家事は女性がやるもの」という価値観で育ってきたこともあり、お料理や裁縫を当たり前にこなす方がほとんど。中には、切り絵やちぎり絵、折り紙など、手作業によって完成する作品作りを趣味に持つ方もいらっしやいました。お母さんたちにとって手作業とはまさに「日常」の仕事。制作過程に手作業を組み込むことで、暮らしの延長線上で作品を制作できる環境が生まれます。

前半の2つのプロジェクト、七夕プロジェクト、屏風絵プロジェクトは、特に手作業に特化した制作過程を採りました。七夕プロジェクトでは、事前リサーチで切り絵や裁縫が得意な女性を発見することができ、こうした「一芸を持つ女性」にリーダー役になってもらうために、どんな作品を作ればいいかを徹底して考えました。そこでアーティストのつくくんが考え出したのが「熊手」です。熊手は、幸せを集めるという縁起物であるばかりでなく、猿ぼぼや折り鶴などの「小さな作品」の集合体でもあります。この「小さな作品」を作る過程でたくさんの手作業が生まれ、手作業の得意な住民が活き、さらには日

常に作品を作る環境が生まれると考えたのです。

とつくんの狙い通り、手作業の得意なお母さんたちが率先してリーダーになり、ほかの住民に作り方を教えるような局面が毎回生まれ、その作業の中で、住民たちの間に自然なコミュニケーションが生まれました。しかし一方で、切り絵や裁縫が不得意な人たちはなかなか作業に入り込めず、逆に作業ができる人は作業に没頭し過ぎてしまうと言う傾向もありました。

そこで2回目のプロジェクトでは、さらに作業を細分化・簡易化させ、「ちぎり絵」という形を採りました。これは、熊手のように個々の小作品で完結することはありません。「ちぎる」や「貼る」という作業を何度も繰り返し、ようやく完成するような作品です。しかも、素材となる紙片を作るときに、和紙や折り紙など単色の素材をちぎるのではなく、雑誌や新聞などの素材からちぎるような形にしました。「ちぎる」という簡単な動作の中にも、どこをどのようちぎるか考える余白が生まれます。つまり創造性を組み込んだわけです。参加の敷居を下げながらも、創造することの楽しさ、豊かさを味わってもらうことができたようです。

また、参加者の話を聞くと「単純作業に没頭できて、イヤなことを忘れられた」という話をされる方が大変多くいらっしゃいました。震災と原発事故、そして長引く避難生活で、住民には計り知れない精神的負担がのしかかっています。「その瞬間だけでもイヤなことが忘れられる」という手作業に、心を癒すという側面があったのだと考えられます。

さらに、全員で協力しながら作品が完成に向かっていく中で、集会所に、ある種の仲間意識が生まれ、場に一体感が生まれてきました。また、自分のちぎった紙が作品に活かされていること、自分の貼った紙が作品の一部になっていること、それが見た目にもわかる作品に仕上がったことで自己肯定感が生まれます。この一体感や自己肯定こそ、被災された方のレジリエンス（精神的回復力）に欠かすことのできないものだと考えます。そして、そのレジリエンスの出発点に「手作業」があることを、七夕プロジェクト、屏風絵プロジェクトで強く感じることができました。

父ちゃんたちにはD I Yでコミット



七タプロジェクト、屏風絵プロジェクトが手作業にフォーカスしてしまったがゆえに、そこからはじき出されてしまったのが、団地のお父さんたちでした。もちろん、前半2つのプロジェクトに関わってくれた男性もいらっしやいましたが、やはり主役は女性たちというイメージが拭えず、「手先も不器用だし、会場には女の人が多いから俺は行かないでおう」と考えてしまったお父さんたちも数多くいらっしやったように見受けられました。

そこで、今年度最後の事業「おでんプロジェクト」では、おでんを振る舞う「屋台」をみんなで制作しようという内容を入れ、日曜大工やD I Yの手法を取り入れることで、男性の参加をより促すよう心掛けました。もちろん、おでんを作る過程では女性たちが活躍します。「料理」としてのおでんは女性たちが作り、そのおでんを振る舞う「場」を男性たちが作るうというわけです。

プロジェクト前の打ち合わせ段階で、すでにお父さんたちの盛り上がりは感じられていました。いわき市や双葉郡は製造業が基幹産業。工業高校などを卒業し、何かしらものづくりに関わってきた住民が少なくありません。自分たちの得意なことを楽しみながら、それで団地の役に立てるかも

しれない。そんな思いがモチベーションに繋がったのかもしれませんが。

おでんプロジェクトでは、既存のリヤカーに様々な装飾をつけて、おでんを振る舞う屋台を作ります。どんな装飾をつけるか、そしてそれをどのようにつけるか、材料はどこで購入し、どこでどのように加工すれば良いか。作る過程だけでなく「決める過程」でも、住民の皆さんが積極的に意見を出し合い、自主的に動いてくれました。得意とすることは積極的に関わりたくなるもの。「住民たちの得意なことにフォーカスする」というのは、今年度の3事業に共通する特徴です。

ここまで自主性が生まれると、コーディネーターやアーティストは、議論が脱線しそうになったときに軌道を修正するだけ。前半2つのプロジェクトを経験したことで、マネジメントについても住民の経験が深まり、皆さんが自ら考え自主的に動いてくれました。住民の皆さんの頼もしさのほうが大きくなり、コーディネーターやアーティストが逆に助けられるという局面が増え、理想的な関係性が生まれてきました。当初の目的である「自立」というところに、少し近づいてきた実感を得ています。

事業を少し俯瞰して見てみると、前半2つのプロジェクトにはコミュニケーションを少し俯瞰して見てみると、前半2つのプロジェクトには「D I Y」をもとにした「建築」的な要素を強く見ることが出来ます。プロジェクトは、ここに至って「集会所」を飛び出し、より広い団地全体、引いては地区全体をも見通したものの、つまり「まちづくり」的な性格を帯びることになります。

これは、男性が集まることと無関係ではありません。男性が集まることで、より強い社会性が生まれ、地域全体を巻き込んだものになるからです。「趣味の集まりではなくて、団地全体の取り組みだ」という意識が生まれ、団地全体のコミュニティを繋ぎ直すきっかけになりました。

最後に、今年度を通じての流れにも言及しておきます。今年度を振り返ると、初回の七塔プロジェクトでキーパーソンを見つけ、住民と信頼関係を構築することに専念。2つ目の屏風絵プロジェクトではより多くの住民の参加を促し、3つ目のおでんプロジェクトでは、男性も交えて団地全体の一体感を醸成しながら、住民の自主性を促すという流れになっています。個別のプロジェクトの過程もさることながら、1年というスパンの長さ、そしてプロジェクトの役割と順序も、今年度のプロジェクトの大きなポイントになっています。

食は土地と人を結びつける



それぞれの地域に独自の食文化があるように、食には地域性が出るもの。提言6では、おでんプロジェクトが注力した「男性の参加促進」について紹介しましたが、ここでは、同じおでんプロジェクトを例に「食の力」について触れたいと思います。

ここで触れたいのは、食が土地と人を結びつけるということ。おでんプロジェクトでもっとも盛り上がったのは、そのおいしさもさることながら「何を具材に入れるのか」についてのアイデア出しでした。おでんという料理は、日本全国津々浦々、各家庭でも微妙に味付けや具材が異なる料理です。もちろんそこには地域性が現れます。

集会所でも、よく「あなたの家では何を具材に入れていた？」という話になりました。かつて暮らしていた双葉郡の食文化について触れる機会がもたらされます。あの頃はあんなものを食べていた、また食べた、そんな会話をするうちに、自然なコミュニケーションが生まれます。「アート」では会話が成立しなくても、日々口にする「食」でなら、みんなが繋がるのです。皆さんにお話を伺い、例えば浜通りでは「練り物」がたくさんおでんに加えられていたことや、双葉郡内で作られる大根や白菜などの野菜がたっぷりと入れられていたことなどがわかり、そ

れらもおでんに活かされました。

おでんの具材が「6種類」と決まっているということも、さらなる対話を生み出しました。「Aさんの入れたいものを入れたらBさんの食べたい食材は入らない」というような状況が起きるからです。そこで、住民の皆さんがお互いに自分の意見を出し合う中で、とても小さなことです。が「合意形成」のプロセスができ上がっていきます。過去の2回のプロジェクトとは違い、このような小さな合意形成のプロセスをすることで、プロジェクトに携わる私たちが、明確に「自立」を意識し始めたからです。

また、おでんプロジェクトでは、「参加できない人を作らない」ということを考えました。究極的には「屋台の前にはいなくとも、外で祭りをしていての雰囲気だけでも部屋の中に伝えよう」という狙いです。過去2回のプロジェクトの中でも、やはりどうしても参加できない、腰が重い方がいらつしゃいます。そこで、例えば遠くにいっても雰囲気を届けたら、あるいは匂いを届けたり、何かそこでやっているという空気感だけでも共有できたらと考えました。

おでんを1杯振る舞うという形にすると、人によっては5分で食べ終わってしまうので、おにぎりを持ち寄ったり、あるいはお菓子などを振る舞ったりすることで、参加者の滞留時間を伸ばし、そこで、会話は成立しなくても「お互いの顔を見る」ことで、団地の一員であることを感じてもらえるよう意識しました。「参加」の意味を拡張し、アップデートするプロジェクトになった気がします。

提言6にも関わりますが、おでんプロジェクトを「食とDIY」のプロジェクトにしたのは、「男性を孤独にしない」という点に注力したからです。阪神淡路の震災、あるいは首都圏における孤独死などを見ても、女性より男性のほうに孤独死が多いことがデータからわかっています。男性は、会社生活と縁が切れてしまうと、社会との接点がなくなり、高齢者ほど自宅で一日を過ごすという傾向が強まります。次第に社会と疎遠になってしまうわけです。そこで「男性の孤独を作らない」という点に特に注目しました。

1年間の最後の締めくくり。団地のお母さんもお父さんも、たくさんの人たちが笑顔でおでんを頬張っている姿を見て、改めて、この団地に小さな「自立」の芽が生まれたことを感じました。

作業を細分化する



例えば、「みんなで1人1脚ずつ椅子を作ってください」と言われて、いきなり椅子を作ることができる人はどのくらいいるでしょうか。椅子を作ったことがない人は、椅子作りに参加することはできないでしょう。そうではなく、「木の棒をカットする担当」や「釘を打つ担当」など、椅子を作るという行程を細分化すれば、自分にもできる何かしらの作業がきつとあるはずです。つまり、作業を細分化していくのは、無関係な人を作らないということに繋がるのです。提言5では、この作業の細分化によって生まれた手作業の創造的な側面について考えましたが、ここでは作業の細分化という手法のほうにフォーカスして考えていきたいと思います。

バリバリ働いている現役世代から見れば、もしかすると椅子を1個作るのも簡単だと思える方もかもしれません。細分化して生まれた個別の作業も、あまりに簡単だと思う方もいるでしょう。しかし、それを80歳の方がやることを考えれば、決してそうではありません。アイデアを考えるのは若い人たちでも、実際に手を動かす人たちの年齢や特徴、あるいは特性を考えただうえで、仕事を細分化しなければなりません。

ちぎり絵屏風では「1枚のちぎり絵を作る」ための工程を細分化し、

「紙をちぎる」、「紙を貼る」といった簡単な手作業を作りました。紙をちぎる、貼るという行為は、おそらく高齢者にもできるはずです。たとえば簡単な作業しか関わっていなかったとしても、「自分でできた」という自信が得られます。そして、自分が関わってできた作品が展示され、さらには、その作品を見て笑顔を浮かべる人の顔を見ることができるようです。「自分の作業が誰かの喜びに繋がっている」。そのような感覚が自己を肯定することに繋がります。自信を引き出します。達成感を与えてくれるのです。

反対に、作業ができないと、自信を喪失してしまったり、「できない人」とレッテルを貼られることを恐れ、その場に来てくれなくなることもあるでしょう。つまり「できない」によって周囲から孤立してしまいかねないのです。難しい作業に挑戦させて得られる達成感よりも、参加する楽しさや喜びのほうにフォーカスするのが細分化です。これは高齢者を相手に行われるアートプロジェクトでは、特に重要なポイントかもしれません。

そしてここでは、紙をちぎるだけ、あるいは貼るだけでも、みんなで誉め合い、評価していくことも重要です。私たちから見れば簡単な仕事

でも、実はそのちぎるという行為すら、一生懸命取り組む人もいるはずです。その行為を誰かが評価すること。そのことも、仕事の細分化では重要なことだと思います。みんなのスタンプ、アーティストやコーディネーターも、互いに評価し合うことを特に意識しました。いや、意識しなくても、皆さん素晴らしいパフォーマンスを見せてくれるのです。

実は、この「作業の細分化」というメソッドは、障がい者の就労支援などで、実際にあたりまえに活用されている方法でもあります。健常者なら一人で10できる仕事を一つひとつ分解することで、障がいを持つ人が取り組める仕事を生み出し、彼らに働く喜びを感じてもらおうとともに、そこにしっかりと対価を支払ったうえで、自立を目指してもらおうという考えです。

今回のアートプロジェクトも、最終的な目標は自立です。できるだけ多くの人たちに関わってもらいたいと考えたのは、作品を大きくしたいからではなく、高齢者が主体のこの団地が、いずれ「自立」してコミュニティを維持できるようにするためであり、その端緒をつかむのが「作業の細分化」です。

否定せずに受け止める



提言4でも紹介したように、今回行われた3回のアートプロジェクトは「日常でアートを作る」ことを目指してきました。作業も日常的に進められますが、どんな作品に仕上げていくのか、何が必要な作業なのか、どのように進めていけばいいのか、アーティストやコーディネーター、そしてみんなの皆さんが、常に団地の皆さんとの対話を求められました。つまり、どう日常的に接し、皆さんのアイデアを取り込んでいくか。ここについても、特段の注意を払って進めてきました。

そこで必要なことは、否定せずに受け止めること。これは「ファシリテーション」などにおいてもそうですが、アーティスト、コーディネーターが中立的な立場で、皆さんと接することを心掛けました。ファシリテートとは、容易にする、楽にする、促進するという意味。「集団による知的相互作用を促進する働き」のことを指しますが、ファシリテーションのポイントは、みんなが話しやすい会議を阻害する要因を取り除くため、事前に取決めしておくルールを作れるかどうか。「意見を否定しない」ということを意識することで、住民の皆さんに「この会合だったら自分も受け入れてくれるのではないか」という安心感を感じてもらうことができ、意見の出し合いが活性化し、また、コミュニケーションも円滑になりました。

もし今回のプロジェクトのゴールが「作品を作ること」だったとしたら、完成から遠回りになる意見や、非現実的な話、個人的な話などは、あまり参考にはできなかったでしょう。しかし、提言2で「ゴールは作品を作ることではない」と紹介したように、今回のプログラムはむしろ「プロセス」のほうに重きが置かれています。皆さんのお話をじっくりと否定せずに伺い、もしそれが状況的に正しくない場合も、否定するのではなく一旦は引き受けたうえで「こうするのはどうでしょう」と提案してみる。そうやって少しずつ本音を引き出していくわけです。

このファシリテーションにおける「発言を否定しない」という手法は、演劇やアートに関するワークショップなどでもよく使われますが、アーティストのつくくんが、実はこれまでに数えきれないほどワークショップに参加しており、その専門性があつたことが、今回のプロジェクトの成功を近づけたと考えています。アーティストが住民に寄り添い、皆さんが作るものと正面から向き合い、否定をせずに住民の創造性を認めることができたからこそ、コミュニケーションが円滑になったわけです。つくくんのように、住民とのワークショップ運営に長け、コミュニケーション能力を持ち合わせたアーティストでなければ、下

神白復興公営住宅でのプロジェクト進行は難しかったかもしれません。

また、「否定せずに認める」というものは、話し合いに限らず、作品制作においても重要な進め方だと言えます。上手下手で評価しない、個々の作品のクオリティは問わないということです。そういう状況でなければ、住民の皆さんが自由に創造性を発揮できなくなってしまう。特に不慣れな住民にとって、何かしらの作品を作ることには「恥ずかしい」ことだと感じられてしまい、継続して参加してもらえなくなってしまう。「そこではきつと自分は受け入れてもらえる」と思える安心感を集会場にどう満たしていくのか。念入りに話合っていないければなりません。

具体的には、ちぎり絵屏風では、誰かが貼付けた紙を活かし、すべて消さずに残す形で上書きするようにしました。それにより、参加者が関わったちぎり絵が多層的に重なり合い、参加した人が達成感を感じられる作品に仕上がりました。ちよつとでも自分が関与した痕跡が残るようにする。作品を否定せずに受け止めることが、レジリエンスには欠かせないのです。

ゴールを作る



最後の提言。それは「ゴールを作る」ということ。具体的には、完成の先に「展示」の場を作ることです。地域の名誉ある場所に展示され、地域の人たちに認められこそ、制作してきた住民の深い思い出になり、生きる喜びを喚起し、自己肯定に繋がるからです。完成させて、団地の集会所に展示するだけではなく、今回は2つの作品を、いわき市民に開かれた場所に展示させてもらいました。

七夕プロジェクトでは、完成した熊手を、いわき市平の夏の風物詩「たいら七夕まつり」に出品。いわき市最大の繁華街、そして駅ビルの中に堂々と熊手が展示されました。さらに、ちぎり絵屏風プロジェクトでは、いわき市平のアートプロジェクト「玄玄天」にチーム下神白として出品。日本全国から集まる芸術家の作品に混じって、住民の皆さんの作品が展示されました。

展示にあたっては、ぜひ作品を見たいという方が大変多く、なんと観光バスをチャーターし、ツアーを組んで平地区へと向かい、数十名の皆さんと一緒に作品を鑑賞しました。住民の皆さんの中には、これまではいわき市のお祭りをじっくりと楽しむ余裕がなかったという方も多く、単純にお祭りを楽しみつつ、自分たちの作品がどのように飾られている

かを見て頂きました。中には、涙を浮かべながら作品を鑑賞されている方もおり、ゴールを明確に設定することの効果を強く感じました。

なぜこのような地域のお祭りとの連動が可能になったのかと言えば、コーディネートを務めるNPO法人ワンダーグラウンドの会田が、いわき市平地区の商店会に加入しているからでした。地域の代表として普段活動している会田がコーディネーターとして入ったおかげで、地域住民との接点を作ることができたのです。このコーディネーターがいなければ、せっかくの素晴らしい作品も、集会所に展示されるだけだったかもしれません。

自分の関わったものが、完成しただけでもうれしいのに、何千人と言う観光客の訪れる夏まつりに展示され、その展示を見て喜んでくれる人の姿を見たとき、喜びはさらに大きくなると思います。そして、自分たちの作品が承認され、自己を肯定し、そこで改めて「仲間」意識が芽生える。行き帰りのバスの中は、かつてコミュニティがほとんど断絶しかかっていた団地の住民とは思えない、にこやかな雰囲気になりました。この提言では、作品を作る「過程」こそ重要だと述べてきましたが、最後に「どのように結末を作るのか」の重要性についても、強く訴えたいと思います。

信頼関係を構築し、日々の中で作品を制作することを通じてコミュニケーションの場を作り、作業を細分化しながら一人でも多くの方に手伝わしてもらい、最後は地域の中で展示の機会を作り、地域の皆さんに認められることで、仲間意識を強固にするともに、自己肯定に繋げていく。あえて大げさにまとめるならば、今年度のプロジェクトを振り返ると、このようなプロセスを辿ったことになります。

ここまでではつきりとゴールを設定したうえで、綿密にプランを練り上げていくには、住民の皆さんとの長い付き合いが欠かせません。やはり「1年」という時間が必要だったのだと思います。そしてその1年の中で、複数のプロジェクトにしっかり目的と狙いを設定した上で、日々綿密に情報交換をしつつ、住民一人ひとりと向き合っていく。下神白復興公営住宅で行われてきた「アートプロジェクト」は、皆さんの考えるアートプロジェクトとは違うかもしれません。それだけ、私たちが向き合う問題が大きく、根深いということを示しているのかもしれない。皆さんの暮らす地区でも、この10の提言がお役に立てばと思います。

Contents-3

検証・イトナミニティ 当事者聞き取り

ここでは、今回のアートプロジェクトに関わった団地の住民2人と、コミュニティ支援のための活動をしているNPO法人3.11被災者を支援するいわき連絡協議会（みんぷく）のコミュニティ交流員、さらには、3つのアートプロジェクト全てに関わったアーティストのとっくんへのインタビューを収録しています。前章で紹介した提言が生まれた源泉ともいうべきインタビュー。当事者はどのように向き合い、どのように動き、感じたのか。その記録です。

やっぱり何かやってないと気が滅入ってしまう感じがいます。考え過ぎてどんどん深みにはまっちゃう。それで、何か没頭できることを探そうっていうことで、その辺で流木を探してきて、それで杖を作ったりするのを始めたんです。釣りをやるときに自分で竿を削ったり仕掛けを作ったりするもんだから、刃

—自分の作品を誉められてその気に

ることがないもんだから、毎日本当に張り合いがなくて。やっぱりストレスは溜まりますよ。持病もぶり返してきて首も痛くてね、腕が上がらないくらい。それで釣りは完全にやらなくなっちゃった。昔はあんなにしていたのにね。

物を使って削るような手作業は得意なんです。それから木の根っこを拾ってきてね、ニスを塗って置物にしたり。きつと、釣りができないからそれで気晴らししてたんだと思いますよ。それでその頃、たまたまですよ、みんなの女の子に声をかけられて、「宍戸さん何か趣味はありますか」とか聞かれて、それで自分の作った流木の作品とかを集会所に持って行ったんですね。そうしたら「素晴らしいですね」なんて喜ばれて、それでその気になっちゃったんだなあ（笑）。それで七夕のプロジェクトやその後の作品づくりに混ぜてもらうようになったんですよ。



下神白復興公営住宅の住人
宍戸 光雄さん



何かものを作るってことは、やっぱりそれに没頭できるんですね。それで没頭してるうちに、何と言うか、マイナスの感情が流れていくと言うのかなあ、作りがら色々な未練を流していくんですね。それで気持ちが少し晴れて前向きになれる。やっぱりものを作るって言うことはそういうことなんだと思います。

私 は川内村の出身で、震災のときには浪江に住んでいたんですけれども、昔から双葉郡の川でやる溪流釣りが好きでね、特に清流で有名な木戸川では年がら年中釣ってました。ウグイやヤマメ。それからアユ。本当に豊かな川だったんですよ。自分で「谷真女（やまめ）の会」なんて会を作ったりしてね、ヒマさえあれば釣りをして。溪流釣りは40年以上やってましたね。ところが原発事故が起きて、釣りどころじゃないですよ。避難であちこちを回ってね、どこにも定住できなかった。郡山や新潟なんかを回ってきていわき市にやってきて、この下神白にやってきたのは昨年です。それで、釣りができなくてや

―失敗が許されるから、みんなのアイデアが入る

間違はなくこの団地の人たちの交流は深まったと思います。顔を見ればわかりますよ。たぶん、何かものをつくって、それが喜ばれるという過程がいいんだと思います。私も率先して制作させてもらって、あの熊手をぐつと上げたときは感動しましたね。あの瞬間、あの作品は審査委員特別賞を頂いて、あれは本当にうれしかった。やればできるんですね。感動で鳥肌が立ちましたもん。

結局、復興住宅って、仮に同じ市町村の人間が同じ棟に住んでいたとしても、人とそんなに頻繁に会うわけではないし、誰

かと話す第一歩がどうしても踏み出せないものなんです。どう話していいかもわからない。でも、ああやって人が集まる場所があつて、しかも無理に話さなくてよくて、作業したい人はそれに集中して没頭できる、そういう場だったからよかったと思うんです。みんなで同じことをやるわけじゃない。それぞれ違うことやってたのに、最後に1つになっていくっていうのがいじやない。

作品も、後からみんなでつけたしでできるのがよかったですね。特に屏風絵のね、灯台から光が出てるんだけど、最初はそれは単に線で光が出てるような描写しかなかったんだけど、あれからいろいろ紙を貼り直してみたり、その上にどんどん書き加え

ることができるとよかった。ほら、失敗が許されるっていうのかな、だからこそみんなのアイデアができて、前の絵を参考しながらどんどん書き加えていく。みんなが関わられるからいいんだよ。

私

が一番最初に集会場に関わったのは、平の七夕祭りに飾る「熊手」を作るやつね。ここに引越してきたときは、まだここにどんな人が住んでいるかわからない時期でしょう？だから集会所に行く人も少なうてね、私ももともとは集会所にはあまり行っていなかったの。

でも集会所のおねえちゃんたちに偶然下で会ってね、「普段は家で何をしてるんですか」とか、「何か趣味はあるんですか」なんて聞かれて。それで切り絵をやっていることを伝えたら、その切り絵を見せてくれなんて言われて、それでお姉ちゃんたちこの家までやってきて、そうしたらその絵を集会所に飾りたいなんて言うの。

下神白復興公営住宅の住人

小野田 恵子さん

それで一番難しいやつを4、5枚選んで、持って行ってもらったのね。私も、自分の切り絵がどんな風に飾られてるか見たいじゃない？ それで集会所の人たちに引つ張られて集会所に行くようになったの。それがきっかけ。そうしたらこれから熊手作るんだって。小野田さんに来てもらいたいなんておねえちゃんたちに言われたら、断れないじゃない。

―作業に没頭できるからイヤなことを忘れられる

切り絵は、郡山に避難しているときに始めたの。娘に「ボケないようにやったら？」なんて言われて。原発事故があつて、最初は別の娘がいる埼玉に避難



したんだけど、家族みんなで避難してきたから1軒の家に9人も避難することになって。それは本当に難儀よ。頭真っ白の状態をやってきたでしょう。ほんと、私も熱が出てひっくり返っちゃつて。それはもう大変でし

れるのね。それでやってるうちに完成が見えてきて、気持ちも盛り上がつてきちゃう。

あとは、あの作業はほとんど毎日やったでしょう。それがよかったかもしれない。毎日やってるから、毎日来てた人が来ないと思うわかるでしょう。「あの人は今日は休みかな？ どうしたのかな」なんて、他の人たちの心配する余裕も出てきて。そのうち、隣の人たちといつの間にかおしゃべりが始まって、お茶飲んだりしてね。

―七夕を手伝い始めてから、お父さんとケンカしなくなった

みんなでバスを借りて平に行つて、熊手が飾られてるのを

見たときはほんとにうれしくて。自分がやったところがわかるでしょう？ あそこは自分がやったのよって言えること、それがいいのね。そのあとに作った屏風絵も、いわき駅のラトブに飾ってもらつてね、あんなに立派な場所に飾ってくれるんだもの、そりやもううれしくて。素晴らしかったですよ。

それにね、自分たちからしたら孫みたいな年の子たちが頑張ってるんだもん、私たちはついていくだけ。とっくんも会田さんも、集会所の女の子たちもみんな一生懸命。芸術とか言われてもよくわからないけど、自分たちのために一生懸命やつてくれるんだもの、私たちはついていくだけだから。

今思うとね、七夕飾りの熊手

たよ。その後は郡山。それでいわきの小名浜の岡小名の仮設に入つて、そのときに復興住宅の募集が始まったから応募してここに来たの。ようやくゆつくりできる家ができたなつて思いますよ。今までは本当に大変だったから。

切り絵をやつてるとね、没頭できるから余計なことを考えなくて済むの。細い線なんかは集中してないと切っちゃうし、切るときにカッターを使うから集中しないといけないでしょ？ それがよかったかもしれない。ただおしゃべりしに行くとか、お茶飲むとかじゃそうはいかないでしょう？ それに、集会所の作業は、切り絵だけじゃなくて、紙を折るとか、のりで貼り付けるとか、単純な作業もあるんだけど、それも集中してや

を作り始めてから、お父さんとケンカしなくなったの。「お母さん行つておいで」なんて言ってくれるんだから。そのうちお父さんも集会所に下りていくようになって、今はカラオケに行つての。だから、ほんと幸せになりましたよ。

最初に集会所に引つ張つてくれなかったら、今も集会所には行つてないかもしれない。おねえちゃんたちが引つ張つてくれて、本当によかつたと思つてますよ。



下神白復興公営住宅 コミュニティ 交流員

鈴木詩織さん／小松由美恵さん

―目に見えた変化

鈴木…この団地に皆さんが引っ越してきてから1年近くになるということもあると思いますが、皆さん表情が穏やかになりました。ストレスや弱音を吐き出したり、辛い経験を共有して助け合える仲間ができたというところが大きいのだと思います。プロジェクトの最初のほうは、何かと言葉がきつくなってしまうがちだった方も、今ではしょっちゅう集会所に集まってくれて、私たちを助けてくれるようになりました。

小松…こうやってものを作って夢中になることでイヤなことを忘れられるんだって話してくれる方が増えました。みんなでわいわいしながら、何か1つのものを作るといふ過程で

れが自分の得意なことを活かせて、一緒にものづくりをすることで、「私こんなこともできたんだ」って気づきになって、新たな居場所ややりがいを獲得していくんです。

鈴木…だから少しずつ皆さん顔が生き生きとしてきたし、自然とそこに会話が生まれるんだと思います。例えば、最初はそんなにおしゃべりしなかったのに、毎日七夕飾り作ったりしているうちに、誰々さん風邪引いたみたいだよ、とか、何号棟の人が毎日「死にたい」って言ってるんだとか、他の誰かのことを気にかけてくれるようになって。それで私たちに繋いでくれるので、私たちの本来の支援もきめ細やかになりました。

小松…そうそう。皆さんお互いに気

くアットホームな雰囲気だなんて思っています。常に人がいて、声が聞こえてきて、とても賑やかになってきましたから。

鈴木…今回のアートプロジェクトの何が一番よかったのかといえば、ものを作るのが得意な人が輝けるってことかもしれません。普段とは違う人がリーダーになっていく感じなんです。得意な人が先生になって何かを教え合ったり、そこに住民の輪ができるんですよ。

小松…皆さん、今までは畑をやったり、自分に仕事があったわけじゃないですか。それが奪われてしまっ、やりがい、生きがいがなくなっ、まってたんだと思います。それって自分の存在意義を見出せないってことにもなりますよね。でも、それぞ

ストレスが発散されるんだと思います。やることで生活にメリハリもできるし、そこで少しずつ気が楽になって、色々なことを話してくれるようになったんだと思います。

鈴木…最初が七夕で、次に屏風絵、そしておでんプロジェクトの順番なんですけど、最初から比べると集会所に来てくれる人の数もどんどん増えてます。最近ではカフェやクラフト作成、カラオケとか、色々な催しを定期的にやってることもあって、住民の皆さんのコミュニケーションもどんどん盛んになってきてますし、今回のおでんプロジェクトでは男性の方が出てきてくれるようになりました。男性が出てこないのが課題だったんです。

小松…外から集会所を見ると、すご

にし合って、「体調大丈夫？」とか、「風邪引いてない？」とか聞き合ってくれて。ワークシヨップに来ない人がいると、「あの人最近来ないね。あたし見てくるよ」なんて言ってくれて、どんどん自主性が生まれたんです。

鈴木…やっぱり七夕飾りのプロジェクトが行われたタイミングと中身がよかったんだと思います。最初は、町ごとの交流会しかなくて、富岡は富岡、浪江は浪江みたいな感じで別々にやっていて。私たちはどこそこ町だから、あんなたちは違うんだ、なんておっしゃる方もいて、どうしても分かれてしまってたんですね。でも、七夕のプロジェクトが町の壁を壊してくれたんですよ。

小松…製作期間が1ヶ月と長くて、

所もなかなかうまく利用できなくて大変でした。だから最初は「顔と名前を覚える」ことからですよ。会ったときに名前と呼ぶと、私のことを覚えてくれるんだなって思ってもらえると思うんです。それから頼まれたことをすぐやること。例えば、医者がわからないと言われたらリストをすぐに持つて行ったり。そうやって少しずつ信頼関係を築いていて、私たちの活動を知ってもらっていました。

鈴木…そうですね。アートプロジェクトでも、やっぱりリーダーになつてくれそうな人には「これこれこうして下さい」ってお願いをしなくちゃいけない場合が多くあつて。でもそこで信頼関係がないと、こちらもお願ひできませんから。それはすごく大事ですよ。

しかも毎日月曜から木曜まで毎日集会所が開いてるっていうのもよかったですよね。好きな時間に来て、しかも毎日顔を合わせるから、いつの間にか町の壁もなくなって交流が進んで、お茶飲み仲間になっていくんです。ちょうど七夕のプロジェクトが始まった頃、4町一緒に何かしなくちゃいけないって悩んだときだったので、アーティストさんに来てもらえて助かりました。

―もともと

賑やかなわけではなかった集会所

小松…私は2015年の1月、ちょうどこの復興住宅に皆さんが引っ越し始めたときにこの仕事に就きました。人と話すのが好きなので、それが活かさればと思つて。高校3年間お寿司屋さんでバイトしてきて、お

寿司屋さんって年齢層が幅広いので、顔を覚えたり名前も覚えられたり、そのスキルが支援の中でも活かされていると思います。

鈴木…私のほうは少し遅くて5月入つてきて、仕事に慣れてきたと思つたときに、七夕飾りのプロジェクトが始まりました。私は祖父母が原町の出身なので、避難生活に対しても人ごとじゃないと思つて、それでこの仕事に興味を持ったんですね。ど、たまたまみんなのプログ見たら、小松さんたちがヒゲダンスしてる写真があつて。すごく楽しそうだなと思つて、それが就職の一番の決め手になったんです(笑)。

小松…でも最初はほんと、ここに引越してきた住民の皆さん同士、ほとんど知り合いもないし、集会

始まる前に、集会所を賑やかにするために住民の方が作った作品の展示をするようにしてたんです。家を回つて少しずつ打ち解けてくると、これ作ってるんだ〜とか言つて見せてくれる人がいて。それを集会所に飾ろうつて話になっていったんです。みんなが使う場所だから、みんなが得意なことを集めようつて。

鈴木…そのときに知り合つたのが、切り絵が得意な小野田さんだったり、流木アートを作つていた穴戸さんだったり。そういう前段があつたので、小野田さんも穴戸さんも、その後のプロジェクトで大活躍してくれて、それがアートプロジェクトの成功に繋がったのかもしれない。

小松…そうだったね。一番最初にアーティストさんが来たときに、まずは

小松…復興公営住宅に入っている方のほとんどは高齢者です。しかも、こういう集合住宅に入ったこともない方ばかりです。最初は、新聞や通販のセールスが酷くて、無理矢理売りつけたりする人も多かったみたいで、住民の方は扉すら開けてくれませんでした。私たちの最初の活動は「訪問」から始まるんですけど、なかなかそこは苦勞しましたね。「みんなぶく」ってなんか新聞みたいな名前なので、セールスだと思われて開けてもらえなかったり。

鈴木…だから最初、七夕飾りのプロジェクトの話があつたときは、住民よりも私たちのほうが不安でしたね。大丈夫かな、ほんとに人が集まつてくれて、期間内にできるかなつて。

小松…ちょうど、七夕飾りの制作が

どんな人たちがここに住んでいるのか、どんなことができる人がいるか知りたいて言われて、そのときに切り絵ができる女性がいいますよ、流木アートやつてる男性もいますよって話になって、それなら大丈夫だ、作品はきつとできるっておっしゃって頂いて。それで少し安心したのを覚えてます。

鈴木…やっぱり何事も信頼関係が大事で、アーティストさんや会田さんのようなコーディネーターは、常にここにいろわけにはいかないの、まずはやっぱり私たちがしっかりと住民との信頼関係を築いておかないといけなくて。アートプロジェクトをやるやらないは関係ないんですけど、とにかくやっぱり信頼関係だなって思います。

つということが大事なこともありません。

小松…それに皆さん高齢者ですから、自分なりのやり方、こだわりがあるので、私たちのルールを押し付けたり、他の誰か特定の方のやり方だけでやると、面白くない方もいらっしゃると思います。だから、私たちの役目は、そういう間に入ってクッション材になることですね。気持ちよく作業できるよう、どちらのお話も聞いてあげる。こういう風にしたら？と聞いてみる。すると皆さん多くの場合は、自分たちで決めて動いて下さいますから。

鈴木…やり方を押し付けるとというのが一番よくないと思います。今回のアートプロジェクトでは、アーティストのつくくんが、本当に私たちに

―信頼関係づくりから始まる

自立支援

小松…私たちは常々「接着剤にはなっちゃだめ」と言われています。信頼関係は大事だけど、くつついて離れられないような関係にはなるなと。皆さんが自立することが大前提なので、依存し合うような関係ではダメなんですね。でも、住民と触れ合う中では、ある程度その方の日常に入り込まないと心を開いてくれません。

鈴木…そうですね。やっぱり信頼できない人に、自分の辛い経験や悩みを話そうとは思わないじゃないですか。信頼関係を築きながら、その方がどうやったら自立した生活を送れるようになるのか、そこを私たちは考えていかないとけません。

いろいろなことを任せてくれて。「支援する」というのではなく、対等な関係で付き合ってもらえました。お互い助け合うイメージでしょうか。そういう進め方だったので、あれだけ素晴らしい作品ができたんだと思います。

小松…最後のおでんプロジェクトでは、アイデアだけじゃなくて企画の進め方や当日の流れまで、住民の皆さんが率先して主体的に考えて動いて下さっています。七夕のときから比べたら本当に大きな進歩。こうして皆さんが繋がって、そして自主的に動く過程をずっと見てきたので、私たちはアートについて詳しくわからないけれど、やっぱりこのプロジェクトをやってよかったと思いますし、私たち交流員にとっても、とても学びになりました。

小松…何気ないお喋りをしているときに昔の話をされて、たまたまお母さんの若いときの写真見てみたいなって言っちゃったことがあったんです。そうしたら「写真もアルバムも全部津波で流されちゃった」って言われて、うわーやつちゃったなあって、そういう経験がありました。あんまり震災や原発事故の話とか、家族の話とかはしないようにしています。

鈴木…そうですね。こちらからあえてしなくても、言えるようになるって言って下さるんです、自分から。最近ようやく団地での暮らしが落ち着いて、そういうことを言えるようになってきた方も多いですね、時間が経ってやっと今言えるようになってきたかな。時間はかかるけれど、待

ものづくりチーム「ta-re」代表。アーティストでありデザイナー。「モノツクリ」と「コトツクリ」の世界を型に捉われず横断的に活動している。その傍ら前衛的な音楽バンド「渋さ知らズ」で美術担当も務める。また日本各地で精力的に様々なワークショップを開催したりとジャンルに捉われない活躍を見せている。ユニクロTシャツデザインコンペ、UT グランプリ 2010 に入賞。



アーティスト
とっくん

3つのプロジェクトにアーティストとして関わらせてもらったわけですが、1年を振り返ってみると、まずは感謝ですね。ばくも1人の芸術家ですから、多少浮世離れしていることは自認しています。そんなばくと一緒に続けてくれた皆さんには感謝の気持ちしかありません。プロジェクトを通して、団地の皆さんも変わりましたが、自分自身も変わったように思います。

6月に、プロジェクトについての打診を受けた時には正直、戸惑いもありました。原子力発電所の事故で避難生活を余儀なくされている方を対象としたワークショップで、さらにそれが「終の住処」ともなりうる団地での

コミュニティ形成のためのものであり、しかもその初期段階を担うという重責です。最初にワークショップに伺った際にも、覚悟はしていたけれども現実はどうだったよりも重いということを感じました。

ただ、そこで改めて決めたことがあります。提供するだけの関係を作らない。施しではなく一緒に作る。先生と生徒の関係には絶対にならないようにする。ということです。それが功を奏して、団地の皆さんも運営側も、みんなが笑顔になれたのかも知れません。ほんと、1年間という時間はあっという間でした(笑)。でも、とても楽しかった。みんなで一緒に楽しめました。



—あなたとのセッションを楽しむ

今回のプロジェクトで工夫したのは「あえて工夫しない」ということかもしれません。住民の皆さんの置かれている状況は日々変わります

し、むしろアドリブで即興的に交わったほうがいいと考えたからです。予定をカチッと決めてしまうと、団地の皆さんを予定にハメ込むことになりますし、少なからず「強制」的なものが入ってしまうんですね。そうではなく、一緒に考え、これから何が起ころうというワクワクやハプニング感を意識しました。みんなにドキドキしてもらいたいと考えていたので、会田さんやみんぶくの方にも全容は言わずに進めることもありました。予定にはない進め方やビジョンが浮かんだりするし、「やられたー」って驚きが出てきて、それでばくも楽しくなるんですね。

ワークショップを通じて、皆さんが「わたし」という存在に自信を持てる気持ちを思い出してもらえたのではないかと感じています。「わた

し」が作った作品が、同じように避難している人たちの気持ちを動かし、町へと誘い、さらには「私たちがどんな前に出ていって友人たちに元気を与えなくちゃ」という気持ちを生み出したわけです。これは本当に大きな変化だと思いますし、どのようにして「わたし」を取り戻してもらおうかというのは、常に考え続けたテーマでした。

ワークショップでも、「ワークショップに参加してくれた住人の皆さん」ではなく、今自分と一緒にいる「あなた」という気持ちを大切にしました。つまり「顔のない群像」ではなく個を尊重することです。「避難民」とか「被災者」というカテゴライズによって失われてしまう「わたし」の考え方や思いを尊重したかったです。ですから、も

ちろん、考えや意見が違っても起こります。でもそこでは、やり方をはめ込むのではなく、皆さんが悩み、考え、体験することを第一に考えました。そのために「すんなりことが運ばない」ようにするのもアーティストの役割だと思います。

ぼくは「浜さ知らズオーケストラ」というジャズバンドで育った芸術家です。今回も「セッション」の本質、つまり「相互性」が生かされています。まずは自分が主役であり、自分が楽しむ。そしてそれが結果的に相手に楽しさを与えているということです。もちろん、ぼくも例外ではありません。皆さんとのワークショップの中で毎回新しい「何か」を発見し、自分の作品制作や実生活にも活かされています。だからこそ皆さんにも何かを発見し、持ち帰り、それ



を育んでもらいたいと考えてきました。

つまり、ワークショップで発見したことは、ぼくではない「あなた」だけのものであり、その「あなた」だけのものを、今度はぼくが教えてもらう。そしてその次は、ぼくが「あなた」に教えることがあるかもしれない。その相互性の連続が重要だということですし、そうなるように、ワークショップを設計したつもりです。「モノ」を作ること、「コト」を作ること、その両方がないと、持続性のある出来事は生まれません。

アートは、社会に対して鋭く、そして深く切り込んでいかなくてはなりません。しかしながら、アートの持つ鋭い切り込み方が、たびたび人を傷つけているのもまた事実です。

アートだから何をやってもいい、というわけではありません。ぼくは「あまちゃん」なので、自分の持つ「正しさ」で人を無闇に傷つけるのが非常に嫌いです。もしかしら、それはアーティストとしては致命的な欠陥なのかもしれません。でも、ぼくは自分の正しさで人を傷つけるより、自分の正しさで元氣と笑顔を共有したい。深く考えてもらうことも大切ですが、何より笑顔と元氣の方がいい。

自分の考えた面白さ、楽しさを一方的に人に投げつけるのではなく、しっかりと共有したい。それがコミュニケーションなのだし、ぼくの思う美術観です。だからこそ、ぼくの頭も、みんなの頭も超えちゃう「何か」がで上がるんだと思います。

2015年度事業報告会レポート

福島藝術計画×ART SUPPORT TOHOKU-TOKYO
では、コミュニティアートについての学びを深め、現場の
声を聞くためのシンポジウム「人を紡ぐアートプログラム」
を2016年2月に開催しました。ここでは、シンポジウ
ムでお話し頂いた、NPO 法人3.11被災者を支援する
いわき連絡協議会（みんぶく）の天野和彦さんの講演に加
え、天野さん、アーツカウンシル東京の森司、アーティスト
の開発好明さんと北澤潤さんの4人によるパネルディス
カッションの模様を紹介いたします。被災地の「命」の問題。
そしてその命と人を紡ぐアートの可能性。4人の言葉から、
コミュニティアートの現在位置が指し示されました。

福島県会津若松市出身。NPOみんぶくー復興支援プロデューサー／福島大学つくしまふくしま未来支援センター 客員准教授。特別支援学校の教員として15年。その後、県教育委員会や県男女共生センターなどで社会教育の仕事を15年。2011年3月11日の東日本大震災、東京電力福島第一原発事故に際し、約2500人の被災者を受け入れ、福島県内最大規模だった「ビッグパレットふくしま避難所」の県庁運営支援チーム責任者として運営に携わる。2012年より、福島大学つくしまふくしま未来支援センターで被災者の生活再建や震災関連死などの調査研究を行うとともに、2015年4月よりNPOみんぶくにも籍をおき、コミュニティ形成のための支援活動を行っている。

NPO 法人 3.11 被災者を支援するいわき連絡協議会（みんぶく）

天野和彦さん

人を紡ぐ・いのちを紡ぐ

— 誰もが生まれてきてよかったといえる地域へ —

みなさんこんにちは。みんぶくの天野です。今日は人を紡ぐ、命を紡ぐというテーマでお話をします。私たちは「命あつてのものだね」と言いますけれども、当たり前ですが、命がなければ皆さんもこの会場に来ることはできませんし、命がなければ僕もこつして皆さんの前でお話をすることもできません。

しかし今、大きな問題になっているのが「震災関連死」という問題です。震災で亡くなられた方のうち、直接死ではなく関連死の方がどのくらいの割合かというと、岩手が8・5%、宮城が8・6%なのに対して、福島はというと51・4%です。福島

では、関連死が直接死を超えてしまっているという状況にあるわけです。

そんな中で、みんぶくを始めとする様々な市民活動団体が支援を続けています。震災から5年近くになりますから、確かに、フェーズが変わったところもありますが、ずっと変わっていない課題もあるんです。それは、支援者間の「情報の共有」です。だれがどこで何を課題としてどんなふうに通じているのか。それが共有されていないんですね。逆に言えば、それが共有できれば、すぐにでも福祉や医療の専門家に繋ぐことができる。ところが、個人情報保護法の壁があつて、個人情報提供されな



いでいるんです。

誰が、どこで、何を課題として、どんなふうに過ごしているのか、この4つの情報こそ、命を守る情報と言えます。そしてこの「情報を共有する」ということを言い換えると、「人と人が繋がる仕組みを作る」ということになります。人と人が繋がることで、情報が共有され、未だにうまくいったままで動けずにいる方々、支援を必要としている方々に繋がることのできるからです。では、どうやって人と人が繋がり、情報を共有し、命を守っていくのか。最大のキーワードが「交流と自治」ということなのだと思っています。

「交流と自治」によって命を守る

震災後、被災された皆さんは避難所で過ごし、その後数年にわたって仮設住宅で暮らし、現在では団地型の公営住宅に住み始

まいといけません。

震災後から、僕は郡山市のビッグパレットふくしまの避難所に支援に入りました。そこでのことを少し紹介します。

避難所に入ってまず何をしたかという、足湯を作りました。足湯と言っても、単に足湯に浸かるのではなく、ボランティアの足湯隊の方たちがとにかく被災者の声に耳を傾けようと実施されたものです。「傾聴ボランティア」の1つということですね。足湯に入り、そして話を伺う。すると、表情を失っていた方々が表情を取り戻していくんですね。まさに人を救うのは人しかないんだなと思った瞬間でもありました。被災された方のコミュニティを支えるには、このような交流の場が必要なんだと改めて感じました。

それから力を入れたのがサロンです。サ

めていらっしゃる方も増えました。震災直後に過酷な生活を余儀なくされた避難所よりも、仮設住宅は安心安全に暮らせるはずでした。でも、安心して安全なはずの仮設住宅で、人が亡くなっていったんですね。孤立死です。

実はあのとき、仮設住宅で亡くなった方の遺書を読んだことがあります。そこに何が書いてあったかと言えば、「もう一度避難所に戻りたかった」と書いてあった。考えてみればおかしな話じゃありませんか。みんな「避難所はひどい、何とかしろ」と言って怒っていたのに、もう一度避難所に戻りたかったと遺書に書かれて、そして自死をされた。

あのときは本当に奇妙だと思っていましたが、その意味がハッキリ分かってきました。避難所に来るときは、皆さんバスに乗せられたり、自治体から指示されたりし

ロンとは言っても、実際には「喫茶店」なんですが、とにかく皆さんにコーヒーを出してリラックスしてもらおうと。最初は喫茶店なんか作っても人が来てくれるのかと不安でした。物資の倉庫に行くと、緑茶や紅茶は見つかるのに、なぜか粉のコーヒーだけがなくて、偶然見つかったのが本格的なドリップコーヒーのセットだったんです。それがよかったんですね。ドリップコーヒーは香りがいい。その香りに釣られて1人2人と喫茶店に来てくれるようになったんですね。

そのうち、喫茶店ですから、マスターを手伝ってくれる人が来てくれるようになった。紙コップを補充したり、テーブルを拭いてくれたり。すると今度は喫茶店に名前があった方がいよって人たちが出てくる。富岡の方がやって下さっていたので、富岡と言えば桜だな、じゃあ「みくら」って名前はどうかろうとなって、「み

て集まってきたんだけど、仮設に行くときになると、1人で避難所に来た方は1人で仮設住宅に入らなければならないわけです。避難所にいれば、雑魚寝ではあったけれども、段ボールの仕切り1枚の向こう側にある息づかいや温もりを感じることでできました。周りの人たちの話す声、耳に飛び込んできたわけですね。避難所にいれば寂しくなかったんだ、ってことに気づいたんですね。

もう一度避難所に戻りたかったと遺書を残した方は、独りぼっちだったんじゃないでしょうか。だとしたら、独りぼっちにさせない、寂しくさせないということを支援の軸にしなければいけません。それを言い換えた言葉が「交流と自治」ということになります。人と人との交流、そして自治活動を促進することが人の命を守っていくんだ、ということですよ。「管理」からは何も生まれません。「自治」で

んなの喫茶さくら」っていう名前がつきました。

皆さんもうお分かりかと思いますが、こうやって交流の場を作ったことで「自治」が生まれていったんです。私はこれをやるよ、じゃあオレはこれやるからって、どんな住民の方ができることが積み上がっていく。この自治がとても大事ななんです。

「命を紡ぎ、災害に強い地域を作る

今回の震災で気づかされたことがいくつかあります。1つは、「普段準備している以上のことは絶対できない」ということ。つまり「普段から準備しておく」ということですね。それから2つめが、災害が起きて次々と新たな問題が発生するわけではなくて、「もともとその地域が持っていた課題が、災害によって顕在化する」ということです。

今、首都直下型地震や南海トラフ地震などが盛んに叫ばれていますが、東日本震災は避難者50万人です。大変な数ですね。でも首都直下はどれくらい分かりますか。想定される被災者は首都直下型地震で700万人。南海トラフは広域的なので950万人です。50万人の東日本大震災でこれほど大変な思いをしてきたのに、首都直下、あるいは南海トラフ地震が起きたらどういうふうになるか。この福島県を、やっぱり伝えていかなきゃいけないんです。

では、災害に強い町というのはどういう町でしょうか。一言でいうならば「人と人が繋がっている町」のことを言います。「防災のまちづくり」なんて言い方をされますが、防災のために人と人が繋がるのではない。もともと人と人は繋がってなければ生きていけない。そしてその結果として防災の町があるということなんじゃないかと

うふうに、地域を足下から見直して欲しいと思います。それはまさに地域を深く知ることです。そのうえで、地域に新たな仕組みを作ったり、生み出したりしていく。これが大事なのではないでしょうか。

―世界に向けて 「福島モデル」を発信する

さきほど、震災前の課題が震災によって顕在化すると話しましたが、今の福島の状況を見ると、震災前から「コミュニティが崩壊してしまった地域」があったということだと思います。これは他県でも同じ課題があるんじゃないでしょうか。例えば何県でもいいのですが、朝起きて、今の時間まで誰とも言葉を交わさず独りぼっちでいた人はゼロでしょうか。朝起きて1人でご飯を食べてお茶を飲んで、1人でテレビを見ている人はいないのでしょうか。いますよね？

思うんです。実は、災害支援の世界の中では「結果防災」という考え方で呼ばれています。もともと人と人は繋がっていなければならない。それが、結果として「防災の町」や「福祉の町」になる。そういうありようを作っていきたいということですよな。

でも、どうでしょう。普段は、「市民の力」とか「協働」とか言うわりに、見守り要員は住民5000人に対して4人しかつかない。これでは高齢者の孤立死に対応できません。ならば「交流と自治」を基礎に、例えば地域の中に自主的な組織としてのサロンを立ち上げていく。いわゆる社会協議会が行うようなものでも町内会でもなく、隣近所の自治的な組織として、お隣組同士で見守る仕組みができれば、見守り要員が4人でも充分対応できます。こうしていかなければ、市民と行政がともにやっていく協働というスタイルにはなりません。

なぜ「交流と自治」が必要なのか。答えは簡単です。命は1人では守れないからです。これはもう当たり前です。人間は繋がることで生きてきた。これは歴史が証明しています。人間は社会を作り、協力和分配によって生き長らえてきました。そういう歴史から見ても、私たち支援者の使命は「命を伸ばし、命を強め、命を輝かせる」こと。そして、人間が1人では生きていけない以上、繋がり、地域で生きていかなければならないということです。

つまり、私たちが問われているのは、どのような地域をつくり、その地域でどう生きていくのかということです。そしてその意味において、例えば今回、下神白復興公営住宅で予定されている「おでんプロジェクト」もそうですが、私たちが取り組んできたこと、そして直面してきたことが、実は地域づくりの「最先端のモデル」になっているということです。別に「おでん」が

なぜそうならないのか。やはり推進性の問題があるのだと思います。必要なのはイコールパートナーシップです。現状を見ると、イコールパートナーシップになっていないんですね。例えば、NPOの皆さんからすると、「来年の契約とれるだろうか」とか、「本当に堂々と意見を言っちゃったら行政の人に嫌われるかな」とか、逆に自治体側も地域のNPOを安いう下請け先だと見てしまう。こういう問題がイコールパートナーを阻害してしまう。

イコールパートナーというのは、対等な意見交換を行える場と機会を設定することです。そのためには、まず前提として、行政側もNPOもしっかり地域を足下から見直さなければいけません。例えば、下神白の復興公営住宅の中で、みんなぶくの仲間たちが、住民一人ひとりの名前と顔を憶えて呼びかけている、そういう

大事だというわけではないですよ。つまりこのエッセンスが大事だということが見えてくる。

私たちが経験してきたこと、実践してきたことは、福島発信のモデルになるのではないかと思っています。そして、これを、これから災害が予想されている土地に活かしていく。震災のときには、福島を助けて下さいと言ってきたけれど、今度はこうして私たち自身がモデルを作っていくことで、福島を、世の中の光にしていくってことができるのではないかと思います。

（パネルディスカッションへ続く）

天野和彦 × 開発好明 × 北澤潤

モデレーター：森司



森司 アーツカウンシル東京
(公益財団法人東京都歴史文化財団)

1960年愛知県生まれ。公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京事業推進室事業調整課長。東京アートポイント計画の立ち上げから関わり、ディレクターとしてNPO等と協働したアートプロジェクトの企画運営、人材育成プログラムを手がける。2011年7月より「ART SUPPORT TOHOKU-TOKYO (東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業)」のディレクターも務める。

開発好明 アーティスト

観客参加型の美術作品を中心に、2002年にPS1 MOMA「Dia del Mar/By the Sea」、2004年にヴェネチア・ビエンナーレ第9回国際建築展、2006年に妻有トリエンナーレ2015「越後妻有大地の芸術祭」に出品。また国外では、ベルリンのニューナショナルギャラリーにて「berlin-Tokyo/Tokyo-Berlin」などに参加し国際的に活動している。

北澤潤 アーティスト

現代美術家、北澤潤八雲事務所代表。東京藝術大学大学院博士後期課程修了。行政機関、教育機関、医療機関、企業、NPO、地域団体などと協働しながら、日本各地で人びとの生活に寄り添うアートプロジェクトを企画している。日常性に問いを投げかける場を地域の中に開拓する手法によって、社会に創造的なコミュニティが生まれるきっかけづくりに取り組む。

天野和彦 NPO法人3.11被災者を支援する
いわき連絡協議会(みんぷく)

福島県会津若松市出身。NPOみんぷくー復興支援プロデューサー／福島大学うつくしまふくしま未来支援センター 客員准教授。特別支援学校の教員として15年。その後、県教育委員会や県男女共生センターなどで社会教育の仕事を15年。東日本大震災に際し、「ビッグパレットふくしま避難所」の県庁運営支援チーム責任者として運営に携わる。

森 天野さんの非常に熱のこもったお話、1時間くらいじゃ終わらないような内容のことを非常に熱く、コンパクトにお話頂いて、そのくらいの熱い思いがないとまちづくりはできないし、牽引できないんだと改めて思いました。今日お話頂く開発さんと北澤さんも震災直後に現場に入られています。自己紹介をかねて、震災のときにどんな形で震災と関わったのかを、お話頂けますか？

開発 開発と申します。ぼくは神戸の震災のときに、1995年ですが、その年に日本1周をする「365大作戦」という、365日かけて人の家に行きながら話をし続けるという作品を作っていたんです。95年にはオウムの事件もあって大変な時期で、たまたまぼくが「山梨」ナンバーだったもので、通報されて最大20人の警官に囲まれて怒られたりもしました（笑）。つまり、震

開発 これは1995年に始まったプロジェクトですね。ぼくは当時油絵を勉強してたんですが、例えば大学生が個展を開こうとなったら、銀座で1週間展覧会をやると20万から40万円くらいかかってしまうんですね。1週間で誰が見に来るかという、まあ200人くらいしか来ないんですが、200人の中から、キュレーターとか美術館関係者、買いたい人はどのくらいいるのかという、可能性はどんどん低くなる。だったら自分で展覧会を開こうと思って1年間の展覧会をやりました。

そのときは「コミュニティアート」なんてことを考えず、「大きな長い展覧会を開く」ということしか頭になかったですね。でも結果的に365日間、人と会い続けることができました。何月何日にお宅に伺いますといって、作品を見てトークをする。説明するためにあの

災のときにぼくは旅をしていて、直接的には何もできなかった。ある方に「お前は何をやってるんだ。アートなんかやらずに現場に杭を打ちに行け」と言われて、それがずっと残っていて今回のことがあったんですね。今回、ぼくが福島を含めて東北に関わりを持てたのは、仙台に友人がいたんですが、それによって思いを馳せることができたからです。そこで最初はボランティアに入って、アートプロジェクトになっていった形です。

森 今、開発さんが「阪神淡路大震災のときは何もなかった」と言いましたけれども、実はアーティストというのは、そのときは何もできなかったんですね。でも今回の震災ではアーティストの初動が非常に早くて、そこに、アーティストとしての学びみたいなのがあるんです。北澤さんは早かったですね。大きな災害にアーティストとして関わる

手この手を使って、アートとは何ぞや、とかそういう話をしながら1年を過ごしました。

そしてその後で「39（サンキューアート）」っていうプロジェクトを始めました。自分の場作りをするためには、

のは今回が最初の経験かと思いますが、その辺はどうですか。

北澤 ぼくは震災後の4月7日に福島県の新地町に入りました。知り合いがたまたまそのボランティアに入っていたというのもあって、それで何かしらできるのかどうかと逡巡しながら入っていきました。まだボランティアセクターがない状態だったので、ボランティアをやりつつ、避難所でゴザを織りはじめ、そこから「マイタウンマーケット」というプロジェクトに繋がりました。先日、ぼくが関わっていた仮設住宅が取り壊されたんですけど、4年間関わり続けたことになりました。

森 ではあいさつも済んだところで、開発さんから過去のプロジェクトについて少しお話し頂けますか？ さきほどちょっと話に出た「365大作戦」から。

人の場作りもしないと思って。全国いろんな人に連絡をとって、アートの日を作ってみんなにサービスしようという主旨で始まって、今年で16年経ちます。今では日本国内の140ヶ所くらいの場所が参加してくれて、3月9日にコヒーが飲めたり、はがきをくれたり、トークショーが開かれたり、アートツアーやったり、そんな感じの住民主体の場づくりになっている。そうやってアートが好きな人が増えると、そのおこぼれがぼくに届くんじゃないかなというプロジェクトなんです。

森 すごく遠いね（笑）。

開発 遠いです。未だに戻ってきてないです。だけど、地域の誰かが面白がつて、地域で場を持ち始めたというのが面白いんです。今は39アートはお休みしてるんですが、ぼくのプロジェクト



からいくつか派生してきていて、例えば、横浜のトリエンナーレの時期に「未来郵便局」というのを開局しました。この未来郵便局は、今のコミュニケーションの早さとも、昔のタイムカプセルみたいなものでもなく、中途半端な「1年後」くらいに届く手紙を書いてもらうプロジェクトです。今まででだいたい3万人くらい参加してくれています。神戸でやったり横浜でやったり。直近では水戸芸術館でもやったんですが、学生が入ってくれて、ハードの部分やレイアウトなど学生が自主的に動いてくれています。破壊は1件だけでしたね。別れたカッブルが直接電話してきてくれて、ぜひ破壊して下さいって。それは事務局に言っして下さいって返事したら、事務局の人が金庫を開けて名簿探してくれて4000通の中から破壊してくれました。

ならない、地域の中で継続的なプロジェクトにしておくことですね。

「日常」っていう言葉について少し話します。ぼくはプロジェクトを始める、ちょうど今から10年くらい前なんですけど、そんなにアートに対して造詣が深いわけでもないし、アーティストになりたかって思いはあまりなかったんですね。というよりも、漠然と日常に対して違和感を感じていたという。日常に対する違和感って何かというと、特にコミュニケーションの違和感だったんですけど、話したり何かを伝えたりする、つまり「自己表現」というものがどこから発せられてるんだろうと考えるようになった。でも、「自己」というわりに、その自己表現は、日常に出会う人や、そこでどんな風に触れ合ったかとか、どんなことを知ったかという経験が自分の自己表現を生み出してるわけですよ。結局、日常によって自己が作られてしまっ

天野 今最新のプロジェクトはどうですか？

開発 震災後にやったワークショップなんですけど「愛銀行」というものがあります。これは5、6人で固まって、「やれること」と「やってあげられること」と「やれないこと」なんかを話し合って、その場の人たちが誰かのために何かをやる、やってあげるワークショップなんです。コンセプトは「あいせること、あいしいことを貯蓄して育てていく、お金を使わない日本初の銀行」というものなんですけど、例えば、1人の女の子がすごいゲーム好きだという話になって、じゃあみんなで人間ゲームしようみたいな感じに膨らんでいくんです。やれることややってあげられることを探すなかでコミュニケーションが生まれていくような感じですよ。

ているじゃないかと。それを何とかしたいなって思うようになって、それで作られた日常ではない、「もうひとつの日常」を作ることではできないかと今のような活動をするようになったんです。

埼玉県北本市でやった「リビンググルーム」という企画も、誰かのために「もうひとつの日常」があったらいいんじゃないかと思って始めたプロジェクトです。団地の商店街に空き店舗があったんですね。そこにカーベットを敷き詰めました。カーベット敷いたら子供が「何が始まるの?」みたいな感じでやってきて、そこからリヤカーを引いて地域のお家をまわって、いろいろな家具を集めてきます。集めた家具はカーベットの上に置いていくと。

天野 くれるものなんですか？

北澤 くれるもんなんですよ。それ

森 もう少しアーティストの話を聞いていきたいと思います。北澤さんお願いします。

北澤 よろしくお願いします。ぼくはアーティストではありますが「北澤潤八雲事務所」という事務所を持ってやっています。ぼくとマネージャー、フォトグラファーがいて、ぼくが仕掛けてマネージャーが育んで、そしてフォトグラファーが残すっていう3人体制ですね。基本的には、いわゆるアートがある場所というよりは、行政や教育機関、病院でやったり企業と組んだり、いろんな社会の中の人たちと一緒にやってプロジェクトをやることを前提にしています。テーマとして持っているのは「日常性に問いを投げかける場を作る」ということです。社会に創造的なコミュニケーションが生まれて、それが地域の文化として営まれてくことを目指しています。一過性に

で、ソファやテーブルや、いろいろなものが集まってくると部屋みたいになって、そこに人が来ると居間っぽくなってくる。そして、このリビンググルームというもうひとつの日常空間と、自宅のリアルな日常空間にあるものを「物々交換」しようという仕組みにします。すると、要らないカバンと、リビンググルームの健康器具を取り替えて下さいみたいな、そういう交換が生まれて。すると、テーブルがこたつになったり、トランプがドンジャラになったり。そうやって日常的な行為が、ここで交換交流されながら遊びに変わってくわけです。

天野 わらしべ長者みたいなあ。

北澤 そうですね。ここまで来ると、ぼくたちではなく地域の人が勝手に交換し始めて「場」が紡がれていくんですね。そのうちリビングルームにピアノ

が来て、ピアノで何かできないかというところでコンサートを開きましよう。それで、リビングルームにきたピアノとカラオケセットを合わせて、コンサートが始まっちゃって。そうしたら、当時埼玉でも上位に食い込むような女の子が歌ってくれて、今では北島ファミリイに入ってるんです。

開発 北島ファミリイって、演歌の？

天野 この取り組みがあったからってことですよね。

北澤 そうなんです。こんなふうにな人が集まってきて、この商店街にこんなに人が集まったのバブル以来だって言われたりして。調理器具が集まってきたら、なんか朝食作るうって子供たちが来たり、だったら作ったものを発表するファミリイレストランにしちゃったり、交換

です。空想なんだけれど、まるで市場のように図書館や服屋、映画館ができていくんですね。で、そのうち「博物館が作りたい」というアイデアが出てきたりして、子供たちの空想を形にするために大人の力が必要になってくるんですね。子供の手伝いをさせられているうちに、大人たちも楽しんでしまふ。最終的には実行委員会という組織ができて、彼らが運営していくことになりました。

天野 開発さんも北澤さんも、人が交じり合う、交差し合う、なんというか「駅」みたいな役割を果たすプロジェクトをやっておられますね。福島の被災地でも、やっぱり今何が必要かというところ、交流の場と自治活動なんです。それを掌握しないといけない。その考えを2人とも具現化されていて、とてもお話を伺えて興味深かったです。



できたもので、勝手に自分たちで創造しながら地域に開いていく動きになっていくんです。最終的には、地域のお母さんたちが運営チームを作って下さって継続していきました。

天野 1回何日間くらいやるんですか？

森 アーティストはプロジェクトを始めるときの主体になるんですけど、やっぱり委ねていくっていうところに、皆さん一番苦心してるんじゃないかと思えます。アーティストは仕掛ける側ですが、地域の人たちに受け止めてもらうためには当事者にもならなければならぬいし、最終的には消えることができるということも重要です。つまり始め方と終わり方の設計ができていなければならぬんです。開発さんも北澤さんもそれができるアーティストなんです。

北澤 もちろん失敗もありますけどね。やっぱり「アーティスト」とか「美術家」みたいな肩書きから受けるイメージが先行しすぎると難しい。例えば「北澤潤です。マイタウンマーケットののをやります」って、つまりプロジェクトを主語にして入っていくようにしています。最初はもちろん「マイタウンマーケッ

北澤 決まってるんです。このときは5年間続けていますね。シャッターがあるんで、お母さんたちが開けたいときに開けられるようになっていました。

森 ぼくはこのプロジェクトにディレクションとして関わっていたんですが、要は終わりがありません。イベントという何かのために目的化してないんですね。ダラダラ続くんだけれど、すごくよく設計されていて、アーティストがいなくてできないという状態から、だんだん地域の人に委ねていくわけです。自治に繋がっていくわけです。

北澤 新地町の「マイタウンマーケット」でもそうでしたね。最初に始めたのがゴザを編むというプロジェクトで、そこでできたゴザを並べて、私たちのまちを作ろうって提案をしました。空想の話なん

トってなんじゃない！」って反応ですけども、その問いかけをちゃんと設定して、問いかけ続けるのが地域に関わるアーティストの職能だと思っています。絵を描くとか作品を作るとかというのではなく、問いかけががちゃんと伝わったら、アーティストの役割は終わりなんです。

例えば、マイタウンマーケットでも、いきなりゴザを編み始めたんですけど、その後になって「これを町にしたらどうか」とか「町ってどんなものだろう」って言ってみたりするわけです。つまりその出会い方をしっかり設計するんです。最初から「みんな仲良くなるためにゴザを作ろう」ではなく、「とりあえず編もう」みたいな。やっぱり、アートプロジェクトの生み出すコミュニティというのは好奇心をもとにしたコミュニティだと思っていて、いわゆるコミュニティとは違うと思ってるんです。

だから、好奇心を持つてる人が、大人子供職業など関係なく集まって来ます。そのせいか、プロジェクトが始まると、既存のコミュニティに対してある種起爆剤になる新たなコミュニティが生まれてきます。それが生み出されるきっかけを作っているのがアーティストなんだと考えています。

森 重要なのは、アーティストが中心になつて見せるためのプロジェクトじゃないつてことです。祭りも本来はオーディエンスのためにするものではなく、自らのものであり、捧げるものだったりするんですね。だからいかに当事者になるかが問題なんです。非常にマイクロナ関係性の中で、何かを確認できる状態が重要なんです。『災害ユートピア』という言葉もありますが、アーティストというのは、まさにそれを非常に平和な手法によって行っている人たち

あったけれど、違うことがよくわかりました。改めて今日感じたのは、文化や芸術が人と人を紡ぐ力があるんだということ、そしてその文化芸術による交流が自治に繋がっていくんだなということ。多くの方が被災をして、命を失った方、命が助かった方がいます。助かった方は、始めのうちは「助かってよかったねー」って励まし合ってたけれど、そのうちに、生きてるだけでは満足しなくなってくるんですよ。で、何かを求めている。ある人は段ボールアートみたいなことをやり、ある人は生花をやり、ある人はお風呂で歌ったり。でも、それを仮設住宅でやるのは、やはり寂しいものです。そこに交流が生まれることで、それが命を輝かせることになっていくんですね。

森 私は天野さんの話を聞かせていただいて、すごく励まされました。実は、

だと僕は思っています。でも、誰かを楽しませることもできるけれど、しっかりと「突く」こともできる。それもアーティストですね。開発さんの「政治家の家」も面白いですよ。

天野 あ、「政治家の家」ってあの南相馬のやつですね？

開発 飯舘村を通ったときに、ゴーストタウンになってしまっているのがものすごく悲しくて、見て聞くのとはまるっきり違う事実があることを痛感させられて。それで、「何も見ないで何かを決める人たち」にぜひ見てほしいと思って「政治家の家」というものを作りました。そこに政治家に住んでもらおうと。それで政治家の事務所のウェブページ全部で700件ありましたが全部1件1件調べて、招待状を送ったんですね。要するに0と1は違つていうか、こう

災害という現場だけじゃなくて、日本が高齢化社会になって「人が元気で生きていく」つてことが課題になっているんですね。ただ生きていくわけじゃない。元気に楽しく生きてくつてことをどういうふうに個々が提起していくかということは、お互いが支え合うときにすごく重要なことになると思うんですね。

その意味で、まだまだアートの可能性とかアーティストのポテンシャルは高いと思っています。今あるプログラムからご当地的モデルを作り出して、アートプログラムが町を元気にすることもできるはずですよ。そうなれば、アーティストという職能者の社会的ポジションも変わらなすんですよ。単に絵描いて好きなことしてるつていう変な人たちではなく、社会に必要な人たち、というように。そのようなことが、まちづくりの側からリーチしてもらつて、アート側がサポートできるようになると、とつ

いうことによつて少なくとも0じゃないくなるつていう状況が何かの力になるかもしれないなつて思つて始めたんですが…。

森 費用対効果つてあるじゃないですか。でも開発さんはアーティスト費用対効果を考へてないんですよ。そんな歩留まり悪いこと普通はしないわけですよ。でも、世間でいうと「無意味性」みたいなところを突いてくるのがアーティストなんです。無意味かもしれないけれど、違つ価値の転換があつたり、ささやかなことへの希望があつたり。全体像が見えないと、「はあ？」つてところもありつつ、結構まじめに考へてるんですね。

天野 うん、お2人の話を伺つていて、今までアーティストというと「ドヤー！」みたいな人たちを思い浮かべることも

でも素晴らしいことになるのではないかと改めて感じる事ができました。天野さん、開発さん、北澤さん、ありがとうございます。

Contents-4

寄稿



2002年 松戸市パートナーシップ検討委員会で、市民活動サポートセンターの設置に携わる。2004年 内閣府市民活動モデル調査研究を経て当法人を設立。松戸アートラインプロジェクト2010事業総括。3.11以降、福島県いわき市で復興支援活動を開始。いわき駅前商店街に「ポートカフェCOCOの森」を開設。地域に根差した人材育成、NPO支援センターの設立運営とコーディネーター育成支援に携わっている。

小山 淳子氏

NPO法人コミュニティ・コーディネーターズ・タンクCOCO代表理事

高齢社会における仕組みづくりとコミュニティアート

被災地のコミュニティアートの役割は、

歴史とプロセスを疑似体験できる場の提供

3・11震災後、それまで何の縁もなかったいわきに、おこがましくも、「復興支援です。」と訪ねはじめて1年も経った2012年暮れ、私は、自分たちが主催する座談会で、もりたか屋の話を聞いた。哲学者内山節氏を囲んで、「コミュニティ再生と経済活動」をテーマにしたサロンだった。実家の店舗をアートスタジオにしたいという若者の話は、彼の熱心さと私の好奇心のせいで、ムズムズするものだった。年が明けて、私は、突然、彼にメールを送り、一人、彼を訪ねた。

JRいわき駅前平地区は、隙間なく密集した建物が並んで、商店街を形成している。商店街通りは、崩れかかった建物と人の気のなさに、すっかり、活気を失っていた。「もりたか屋」は、昭和の復興期と高度成長期の懐かしい匂いがある。太平洋戦争後に建てられた3階建ての建物だ。築60年は超えているだろう。中に入ると、突然、人の笑い声やひそひそ話が聞こえてくるような幻覚に襲われる。雨漏りの音が聞こえる。ひび割れた壁、

傾いた床。濡れた階段を上って、戸を開けたら、隣のビルの中。「隣のビルの外壁は、こちらのビルの内壁」と言いたくなるほど、隣接した建物と共存状態になっている。

3階には、回収された壊れた屋根瓦が山積みになっていた。天井近くには、幅一間もある神棚があった。おそらくは、景気の良いころには社長室で、恵比寿大黒天やら、熊手やら、商売の神様が鎮座しておられたんだろう。不思議なことに、主のいない神棚の横に、小さな鋳物の犬の置物が、守り神のようにしつかり四足で立っていた。

もりたか屋は、アートスタジオではなく、既に存在そのものがアートだった。

それから、ずっと、もりたか屋は、復興のコミュニティアートのシンボルとして、私の中にある。

かつて、昭和40年代頃まで、女工さんが住み込んでミシンを踏んでいたもりたか屋は、70年代には、ジーンズショップを展開し、今では高齢者向け衣料品店になっている。日本経済の発展の縮図を見よう。

屋根の下で、傘をささなくてはならない建物は、役に立つということ、有用な、機能的な、合理的な、と言ったことを、根底からひっくり返した。この建物の中で、私たちは、震災に直接的な被害を被った存在として、対等でもないし、福島第一原発事故の脅威から自由でもないし、互いの権利関係さえも、時間と瓦礫の中に埋没して見えなくなっている。

震災後の未来は、どこにあるのか？

もりたか屋は、問う。この歴史をもう一度、繰り返すのか？

ところで、3・11を契機に、私が関わりを持った地域は、いわき市だけではない。自分の住んでいる街の中にも、震災によって、突然、スポットライトを浴びるように、私の目の前に現れた町がある。

住む人が自虐的に「松戸の陸の孤島」というUR梨香台団地は、千葉県松戸市の南に位置する。昭和50年、高度成長期を支えた勤労者の核家族向け集合住宅として、独立行政法人都市再生機構により建設されている。建設総戸数963戸、入居戸数850世帯（平成22年調べ）。高齢化率約60%（町会調べ）という他地域でも例を見ないほど高齢化率の高い地域である。入居には収入上限があり、入居時の連帯保証人が必要とせず、高齢者に優遇した家賃であることから地縁・血縁の薄い高齢者層が多く入居している。

団地の所在地は、JR松戸駅から45分。バス便は1時間に2本程度。かつてのバスターミナルは雑草で覆われ、団地内のショッピングセンターは、空き店舗が並び、営業店舗の中に生鮮食品や野菜、日用品を扱う店舗はない。

近くの診療所の先生は、「気にかかる患者がいても、自己負担分の医療費や介護サービス利用料が払えなくて、だんだんと足が遠のくんだよ。」と、表情を曇らせる。独居高齢者の困窮した生活が顕著に見られる。

震災の発生時、11階建ての上階に住む高齢者は、エレベーターが止まると避難する事ができず、ゆがんだ玄関ドアをこじ開ける力もなく閉じ込められてしまった。誰がどこに住んでいるか分からず、救援も出来ない。さらに町会の倉庫に保管されていた非常食

等は重い箱詰めのため、高齢者では持ち出すこともできず、役に立たなかった。炊き出しをしようにも、団地内のショッピングセンターは空き店舗が並び、営業店舗の中に生鮮食品や野菜等を扱う店舗はなく、結局、集会所に集まった避難者は、互いに持ち寄った食糧で空腹を凌ぐことになった。住民たちは、この経験から自分たちで支え合う地域サロンを開き、見守り活動を始めようと考えた。

こうして、2013年3月、メンバーの平均年齢76歳のNPO法人アイギスが誕生した。アイギスは、常設のサロンを開き、コーヒーやカラオケを置き、日用品や生鮮食品の販売を始めた。近隣の人々が集いはじめ、最近では、認知症や生活能力が低下した高齢者の情報が集まり始めている。

こんなことがあった。

サロンの開店前から服装の乱れた高齢の女性が入口に立っているのを招き入れたところ、瘦せて食事の認識がないことにスタッフが気付いた。数日、お風呂に入った様子もない。自宅を探し当て、夫に連絡したところ、家の中は荒れて、夫も介護疲れと認知症の傾向が見えた。金銭感覚も失っているようだ。近隣のヘルパーステーションに連絡し、地域包括支援センターから支援を受けて、貯金の確認や年金の手続きを済ませ、介護認定を受け、夫婦の日の中の居場所を作った。

先日、久しぶりにアイギスサロンを訪問したら、すっかり小奇麗になった彼女が、手を広げて、「ダンスを踊りましょうよ。」と叫んだ。「私を覚えてくれるはずもない。」と思いがちながらも、嬉しくて、枯葉舞う11月の公園の広場で手を取って踊った。

NPO法人アイギスのサロンを高齢者が心の支えにして頼っている姿が見える。見守りの拠点としての機能を果たし始めているのだ。一方で、アイギスのメンバーは、高齢者が高齢者を支えることに限界を感じ始めている。

ちょうど、そのころ、同じ松戸市内の認可地縁団体幸谷町会が、自動電話「あんしん電話」をツールとして活用した定期的な地域見守り活動を始めた。幸谷町会の見守り活動は、医療機関と連携し地域住民による見守りボランティアを組織して、個人情報管理や情報共有の態勢を整えた非常に実践的なシステムだった。その仕組みを知ったNPO法人アイギスは、近くの診療所の協力を得て、梨香台団地にもあんしん電話の仕組みを導入しようとした。その二つの地域が出会いとなって、住民の手による地域見守り活動が広がっていった。

この仕組みの原点は、松戸市のUR常盤平団地の近くで開業する堂垂伸治医師が開発したプログラムだ。

「UR常盤平団地の孤独死」は2005年にNHK特集で放映されて一躍有名になった。

堂垂医師は、診察の足が遠のく独居高齢者の患者向けに、自動音声で週に一度定期的に安否確認する自動電話（お尋ねフォン）を考案したのだ。当初は、診療所と患者の安否確認ツールであった。低所得の高齢者層も加入できるように、現在使用している電話番号をシステム設置機関に伝えるだけで、簡単に登録でき、患者は電話を受けて回答す

るだけなので、経費負担がない。

その安否確認ツールを、幸谷町会やNPO法人アイギスが導入するや、たちまちに、「医療機関」と「患者」つまり、「診る側」と「診られる側」という二項対立の構造を、様変わりさせた。医療機関を介在させた地縁組織と住民のコミュニティ再生の仕組み「あんしん電話」になったのだ。

お金で購入できる見守りサービスは、ITを駆使しセンサーやGPSを搭載して、人の手を借りずに済むが、見守られる人を地域から隔絶させ、ひたすら、孤独に陥らせている。お金を払って孤独を買っている。「販売者」と「購入者」、「提供する側」と「提供される側」という関係しか作れないからだ。

自動電話を使った「あんしん電話」の仕組みの大きな特徴は、緊急時の迅速な対応ではなく、人と人の緩やかで適度な距離の関係づくりだ。

週に1回程度の定期的な自動電話のメッセージでは、緊急時の迅速な対応は難しい。あんしん電話の良さは、自治会などの地縁組織が主体になり、システムを設置する医療・介護機関と、見守りボランティア活動があんしん電話の情報をもとに繋がっていることにある。つまり、自治会という地縁組織と、医療・介護の専門家集団、ボランティアという志縁組織という3つのステイクホルダーが、あんしん電話というツールを使って、対等に関係づくりをしていくところにある。このツールから得られる情報は、地縁組織、専門家集団、志縁組織というネットワークの中を循環し、常に最新の

情報に更新され、特定のところに集約されていけないので、三者の関係はバランスのよい対等な関係になる。

「あんしん電話」は、個々人が購入してできる見守りサービスの関係、つまり、「見守る人」と「見守られる人」、「ケアする側」対「ケアを受ける側」の関係や「心配する個人」と「心配される個人」といった1対1の関係を、1対ネットワークの関係に変えていくことができる。「そこに暮らす人」と「受け止める地域」の関係にすることができるのだ。

あんしん電話を活用した見守りの仕組みは、介護制度の対象になっていないけど不安を持っているまだ元気な高齢者を対象とするものだ。そして、その意思を伝えることができる人が加入できる。お金があろうがなかろうが、つながりを求めている人を、つながりの輪の中に取り込むことができる。

けれど、続けられ続けるほど、課題は深く、困難になっていく。自分たちの限界が見えてくる。闇の向こうが透けて行くように、さらに、街の底に沈んでいる取り残された人々の姿が見えてくる。電話が繋がるどころか、存在に気がついてさえもらえない人々が、街の片隅に暮らしている。誰の手も届かないことに、どうすることもできずに息を殺して生活している。つながりを求める手立てさえもない人たちだ。

アパートの扉は開かれることはない。

昨年、いわき市の復興公営住宅を視察した。

そこには、常盤平団地や梨香台団地が新しくなって、そのまま再現されていた。この新居にどれだけの高齢者世帯が入居するのだろうか？常盤平や梨香台は、40年かけて高齢化したのが、この団地は、このまま、一気に高齢化するだろう。

私たちの苦しみは、ここでまた、繰り返されるのか？

松戸の経験は、ここで、活かされることはないのか？

もりたか屋は、ささやいている。

ひたすら、走り続けた経済の歪みはここにあると。

屋根の下は傘は矛盾だらけだけど、

屋根の下でも傘をささなくてはならない現実はこちらにあると。

松戸といわき、常磐線で一本に繋がっている。

互いのまちが持つ困難な課題は、表面的な様相は違うけど、社会の在り方から来る病巣は繋がっている。

どのように取り組み、どのように表現するか、それぞれができることは違うだろうけど、震災後の希望は、この一本の道にあると、私は、思い込んでいる。



1961年神奈川県藤沢市生まれ。筑波大学大学院芸術学修士修了。
岡山県立美術館を経て、現在福島県立博物館専門学芸員。福島県会津若松市在住。

川延 安直 氏

福島県立博物館学芸員

文化芸術の華が咲き誇る福島

東日本大震災後、福島県内でのいくつかのアートプロジェクトに関わっている。まずはきっかけから書き起こしたい。

私にとって大切な展覧会とアートプロジェクトがある。「岡本太郎の博物館」「会津・漆の芸術祭」である。

「岡本太郎の博物館」は、2009年秋の開催。2007年に出版された赤坂憲雄福島県立博物館長の『岡本太郎の見た日本』や2011年の生誕100年に向けて活発化した岡本太郎の再評価に刺激されての企画だった。岡本太郎の思想形成にミュージアムが大きな役割を果たしたことはよく知られている。その例にない、福島県立博物館も現代の美術表現のために扉を開こうとしたのだった。企画展示室では岡本太郎がモノに向けた視線を感じさせる写真作品を展示。常設展示室には現代の美術家の作品を資料と並存させた。一隅に置かれたマスコットの作品から、展示室の空間を利用した大規模なインスタレーションまで、幅広い作品が展示され、博物館の雰囲気はこれまでにない生き生きとした空気に包まれた。しかし、アンケート評価は分かれた。批判的な意見の主なものは、「分からない」というものだった。

ちなみに館内の評価はほぼすべて否定的なものだったことは正直に記しておこう。

翌2010年には、「会津・漆の芸術祭」が始まった。2010年の第1回から2012年の第3回まで、2011年を挟み、会津の特産品である漆を中心に据えながらも内容は変化を重ねることになる。会津の漆工芸の技術と現代美術の表現を出会わせることで、両者にプラスの影響を与えることを狙った。一方、会津若松市・喜多方市の市街地、三島町・昭和村の中山間地に会場をもとめ、地域と博物館の関係性の構築もミッションだった。喜多方市では現在もさまざまなアートプロジェクトが行われている。

「岡本太郎の博物館」「会津・漆の芸術祭」両者を通じて得た大きな財産は、人的なネットワークだ。喜多方市美術館長の後藤學氏、福島大学の渡邊晃一教授、当時東京藝術大学助教の伊藤達矢氏、同大学院の伊藤将和氏らは現在のアートプロジェクトにとって忘れられない恩人である。そして、いわき市の美術家吉田重信氏には数知れない機会に協力をいただいた。各地で制作・発表を続け、地域の若手美術家を育て、県外の美術家をいわき市に招く。国内を飛び回っての活発な活動にどれだけ励まされたことか。

前置きが長くなった。アートプロジェクトは短時日で出来るものではない。各地の事例も同じだろうが、開催地域の事情に向き合う中で次第に醸成されていく。手探りで始まった第1回「会津・漆の芸術祭」の2010年度が終わり、芸術祭の力たちを整える2011年度第2回に向けての動きが始まった3月11日、東日本大震

災が起こり、東京電力が福島第一原子力発電所の事故を起こした。私事だが、この日二人の親族を失った。多くの人生が変わった日だった。

2011年度から開催予定で数日前まで関係者会議を開いていた「奥会津アートガーデン」は中止になった。「会津・漆の芸術祭」と「奥会津アートガーデン」の両輪で市街地と中山間地域がオール会津で取り組むアートプロジェクトになるはずだった。震災がなければ福島のアートプロジェクトは今とはずいぶん違った姿になっていただろう。

新年度に向けての動きが停止する中で、「会津・漆の芸術祭」の役割を考え続けた。アートプロジェクトはこんな状況でもきつと役に立つ、継続したい、との思いは弱まることはなかった。幸い「会津・漆の芸術祭」は継続することとなった。大幅な予算減額となったものの、「東北へのエール」を掲げ、福島へ寄せられる励まし、共感の思いを受け取る場として動き出すことになった。

今回は震災後のアートプロジェクトがテーマであり、ここからが本題となる。「会津・漆の芸術祭」は、本来のテーマである漆に加え「東北へのエール」を掲げ、福島への思いを表現する作品を積極的に受け入れた。予算も無い中で、参加してくれた美術家も我々スタッフも手弁当に近い状態で良く動いたと、今にして思う。

芸術祭を進めるうち、いくつかの団体からのアプローチがあった。中でもいち早くプロジェクト実現に向けて動き出したのが、日比野克彦さんのH.M.V（ハートマークビューイング）と東京文化発信プロジェクト室（現、アーツカウンシル東京）によ

るASTT（アートサポート東北東京）だった。

H.M.Vは、日比野克彦さん発案のワークショップ。参加者は端切れを縫い重ねてハートマークを刺繍、それをつないで大きなタペストリーを作る。このワークショップのポイントは作品を完成させることではない。日比野克彦さんは言う。「そこに居ていい理由」を作り出すのが役割だと。2011年から2013年にかけて何度ワークショップを行っただろう。第一回となった会津若松の東山温泉を利用した二次避難所でのワークショップには広間いっぱいの方の参加者が集まった。避難所から仮設住宅に移動する間際の開催であったため、避難者のみなさんにはひとしお思い出深い時間だったようだ。その後もたびたび仮設住宅や復興イベントにおじゃまして小さなワークショップを繰り返した。そこでは対話が主人公。目を合わせることなく手作業をしながら、ポツポツとまた賑やかに話して花が咲く時間は、シャイな日本人にはとても取り付きやすいものだった。ご紹介したいエピソードはいくつもある。今思えばすべて記録しておくべき内容だったと思う。

2011年夏、東京文化発信プロジェクト室から福島での活動について参加の打診をいただいた。福島県立博物館に結びつけてくれたのが伊藤達矢氏だった。「岡本太郎の博物館」以来、福島でのアートプロジェクトに関心を寄せてくれていた伊藤氏の存在は大きい。

東京文化発信プロジェクト室と企画運営した「週末アートのスクール」は、今に繋がる福島でのアートプロジェクトの基礎体力を付けてくれた事業だった。原発事故

後、放射線量の低い会津地方での保養を兼ね、会津の文化と自然をアーティストとともにワークショップを通じて楽しむ一泊二日のプログラムで、第一回は2011年秋、日比野克彦氏が担当。西会津町の雑木林に段ボールでツリーハウスを作った。その後も喜多方市、三島町で、郷土の食材、歴史的建造物、伝統行事、雪や植物をテーマに回を重ねた。参加者集めには苦労したが、参加者の満足度は高かった。また、大きな成果の一つとして、各地域の担当団体が実際の運営を通じてアートプロジェクトに習熟していったことがある。「週末アートスクール」の経験は、この後に続くアートプロジェクトの展開に活かされていくことになる。

2012年度、突然の大震災から一年を経て、震災に対応すべくプロジェクトが組まれていく。「週末アートスクール」を実施した東京文化発信プロジェクト室のASTTには、福島県も加わり「福島芸術計画×ASTT」として福島県内のアートプロジェクトを実施していく。2011年から2012年に、南相馬市、いわき市、福島市でさまざまなワークショップ、フォーラムを展開した。平田オリザ氏による演劇ワークショップ（南相馬市）・和合亮一氏による詩のワークショップ（いわき市）・ものづくりをテーマにしたフォーラム（福島市）など内容は多岐にわたる。当時は手探りであったが、これらの事業を実施したことで、開催地の諸団体、施設との関係が構築されていった。特にいわき市のNPO法人ワンダーグラウンドは、現在、福島芸術計画×ASTTの事務局機能を担うとともにいわき地域のアート事業を次々に生み出している。

2015年度現在も継続している「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」も2012年にスタートした。同実行委員会を組織し、福島県立博物館が事務局を務め、文化庁の補助事業として実施する文化芸術による復興支援事業である。

年を重ねて事業内容は変化しているが、当初は、福島県内での活動を望むアーティストらを被災地につなぐべくコーディネートするのが目的だった。美術家の岡部昌生氏のプロジェクトは今なお継続中、写真家の瀬戸正人氏の参加以降、写真を主軸にした「福島写真美術館プロジェクト」も継続中である。

年間8〜9のプロジェクトを抱える「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」のこれまでの全体像に触れることはここではないが、2015年の事業内容のいくつかを紹介する。「岡部昌生フロッタージュプロジェクト」は、はま・なか・あいづ文化連携プロジェクトを代表するアートプロジェクトである。北海道を拠点にフロッタージュの技法で国際的に活動する岡部氏は、この国の近代に切り込む視点を持って広島を重要なテーマとして取り組んで来た。岡部氏には「岡本太郎の博物館」に参加いただいていたが、震災と原発事故に見舞われた福島に必要なアーティストであると震災後すぐに気付いていた。2012年に南相馬で始まった活動は、飯館村、大熊町、石川町へと拡がっている。2015年度は石川町での希少元素採掘工場跡での大作制作に続き、飯館村で除染のために伐採されたイグネ（屋敷林）切株の連作に取り組んでいる。2011年以降の福島を記録する重要な作品群となることだろう。同プロジェクトは、実行委員会メンバーでもある南相馬市博物館との二

人三脚で実現したもので、地域博物館の活動領域を広げることにもなった。

「福島写真美術館プロジェクト」は、震災後いち早く写真家の活動の中から芸術性の高い作品が生まれてきたことに着目し、福島での写真、映像作品の制作、公開を支援してきた。赤坂友昭氏は南相馬と奥会津の自然と暮らしを追い続けている。華道家の片桐功敦氏は数ヶ月の滞在を含む二年間の南相馬での活動を通して被災地への鎮魂と震災の記憶を込めた写真作品を制作した。安田佐智種氏は津波で流失した住宅基礎を素材に震災で失われた暮らしの記憶を追った。本郷毅史氏は命と暮らしの源である水源を撮り続けている。2015年度からは土田ヒロミ氏、村越としや氏が参加している。

「夢の学び舎プロジェクト」では、いわき市の豊間・好間両小学校でアートワークショップを定期的に実施した。同プロジェクト実施にあたってはNPO法人ワンダーグラウンドの力強いサポートがあった。地域NPOの教育現場への参画の可能性も見えたように思う。

「黒塚発信プロジェクト」は、福島大学渡邊晃一教授の提案により、安達ヶ原の鬼女伝説を震災後の福島の視点から読み直し、映像作品を制作、フォーラムなどで共有する。

震災から5年、福島の状況は変化している。それに合わせて、はま・なか・あいづ文化連携プロジェクトも重点を変えてきた。当初は震災後の被災地の記録、心の復興に重点を置いてきたが、その後、震災後の福島の変化の記録に、現在は福島の

現状の発信に重点を移しつつある。

2014・2015年度の福島芸術計画×ASTTは「森のはこ舟」「いわきコミュニティ」の両プロジェクトに取り組み始めた。「会津・漆の芸術祭」の成果を継承し、震災で中止となった「奥会津アートガーデン」が準備した基盤を活かし、福島県の森林環境税を活用して森林文化に取り組むことを目的に始まった「森のはこ舟」は、2年を経過し開催地の西会津町・三島町・喜多方市で定着し始めている。当初から運営を委ねるアートNPO FANを設立し、3地域にエリアコーディネーターを立てて事業を進めている。伝統食・再生エネルギー・伝統行事・限界集落の再生など各地域の課題を森林文化という大きなテーマで括り、森林文化からの福島再生を大きな目標に掲げている。各地域で本事業から派生したパートナーシッププログラムが生まれるなど成果が上がる一方、アートを通して森林文化を明快に伝えるための手法がさらに求められる。

震災から5年、仮設住宅から復興公営住宅の建設・入居に伴うコミュニティ再生に備える目的から始まった「いわきコミュニティ」プロジェクトは、いわき市下神白の復興公営住宅集会所を舞台に2015年から取り組んでいる。下神白住宅は原発事故被災地域といわき市の津波被害地域の方々の住宅が隣接する複雑な状況にある。その集会所を舞台に、入居者のみなさんが集う場をいかに作り上げるか、きわめてデリケートなテーマに挑んでいる。このプロジェクトは、はま・なか・あいづ文化連携プロジェクトと福島芸術計画×ASTTが連携した事業でもあった。当初

はいわき駅前の年中行事として親しまれている七夕まつりに七夕飾り制作で参加し、それをきっかけに住民間の交流を生み出すプログラムを、はま・なか・あいづ文化連携プロジェクトが実施した。NPO みんぷく、アーティストとつくん、NPO 法人ワンダーグラウンドの細やかな運営により次第に参加者の輪と和が広がり、丹精込めて制作された七夕飾りは賞をいただくことが出来た。その後七夕飾り制作で生まれた交流は、福島藝術計画×ASTTに引き継がれ、集会所は交流の場として活用されるようになった。今後も新たな企画が計画され、懸案だった男性の参加者も増えつつある。

喜多方市でもアートプロジェクトが活発に動いている。「会津・漆の芸術祭」会場としてアーティストを受け入れた喜多方市では、芸術祭終了後も「喜多方夢アート」事業が実施されている。「喜多方アート暮らし」「せびろまの夢」の両プロジェクトが含まれ、「喜多方アート暮らし」では、アーティストと地域の交流が定着しつつある。「せびろまの夢」は、喜多方の地域性がもたらしたアートプロジェクトと言える。大正時代の美術愛好団体「喜多方美術倶楽部」の土壌があった喜多方では、戦後も美術愛好者のサークル「せびろま会」が活動した。戦後の困難な状況下でも芸術に親しもうと佐藤恒三氏が提唱した同サークルは、セザンヌ・ピカソ・ロダン・マチスの一字を取って名付けられた。同じく蔵の町として知られる岡山県倉敷市の大原美術館は、福島での復興支援として同館所蔵品の公開を提案。セザンヌ・ピカソ・ロダン・マチスすべての作品を収蔵する大原美術館ならではの企画としてせびろま

会の思いを実現するべく「せびろまの夢」が2013年にスタートした。アーティスト受け入れに民間が積極的に活動している喜多方の特性を伸ばすために、名画の展示に加え、大原美術館のアーティストインレジデンス事業参加アーティストを招聘している。展示会場となる喜多方市美術館を中心に大原美術館、アーティストと喜多方の関係者の交流は年々深まっている。

まだこの他にも紹介したい事例は少なくないが、最後に今後の課題をあげておきたい。このように多くのアートプロジェクトが動き出していることは、震災と原発事故の傷から福島が復興するために重要であることは言うまでもない。現場のスタッフ、切り盛りする事務局、支援者の努力は福島でのアートプロジェクトの継続発展を願う高く強い志に支えられている。この志をぜひ行政、支援団体と分かち合い、文化芸術の華が咲き誇る福島を国内外に発信したいと願っている。



1972年生まれ。精神科医。東京大学医学部医学科を卒業後、東京や埼玉で長期入院後の統合失調症患者の社会復帰や、慢性化した難治のうつ病患者に対する治療的アプローチに取り組んできた。2012年4月より福島県南相馬市の雲雀ヶ丘病院に勤務。同年7月からは地域のメンタルヘルスの問題に取り組む「みんなのとなり組」という団体を立ち上げ、2013年5月にNPO法人として認証された。

堀 有伸 氏

精神科医 ほりメンタルクリニック院長

被災地にいる精神科医からの、 アートへの期待

もちろん、アートのなかには、健康で充実した精神が、みずからの力をのびのびと世界に向けて発散させるような仕方で作られてくるものもあるのだろう。明るく、力強く、生の喜びに満ち溢れているような作品が。

しかし、ところが引き裂かれ、砕かれたときに、うめき声とともにその傷を覆うために生まれてくるものもある。膿んだ傷口を、ぐじゅぐじゅと湿らすように染み出てくる組織液のように、ここから沁みだしてくるもの。表現以前の、表現の原基のようなもの。

奇妙に聞こえるかもしれないけど、私は被災地での幽霊の話を聞いて、なぜだか少しところが癒されるような気がした。津波の被害にあった土地に多い。海の近くにいくと、死んだ人の霊に会うことができる。本当なら、怖い話。

思いもかけず、突然に中断されることを余儀なくされた生。

逝ってしまった人たちと共に過ごさずであつたのに、失われてしまった時間。

悲しいか？確かに悲しい。でもそれ以上に不思議。だって、いるのが当然なはずなのに、いないのだから。

そんな人たちと、また海に行くと会うことができる。幽霊だけど。

そう言えば、震災後1年位は、こんな話をよく聞いた。海で釣った魚を、食べることに怖い。一つは、放射能が気になるから。もう一つは、津波の後の海で取れた魚をさばいたら、人の髪の毛などが、その魚のお腹からたくさん出てきたのを見たから。

震災をきっかけに、認知症を悪化させて徘徊をするようになり、精神科病院への入院となった高齢の男性。

医学的には、病名…認知症、症状…徘徊としか書きようがない。

もはや、言葉も忘れてしまったようで、いつも不機嫌で、まともに話をすることもできない。

そんな人の徘徊の内容が、夜中に仮設住宅を抜け出して、原発から20km圏内の自宅に戻ろうと、長距離を、とぼと歩いていつてしまうことだった。

注意されても、何回もそれをくり返す。徘徊するおじいちゃんが、のんびりと過ごせるような広い家も、近くで暮らしている、たくさんの子供たちや孫たちもない。

もともとは、原発から20km圏内の町に暮らしていた高齢者。

地域では「キレもの」と評判が高く、優秀で勤勉で顔も広く、そのまちを引っ張ってきた人物の一人。震災後、借り上げ住宅で暮らすようになった。その途中で、妻を亡くす。

それでも、人に会う時には気持ちを緊張させて、誇りに思う故郷の歴史や文化の話、それを守ってきた自負、そして故郷再興への思いを語る。

神経のほどよい高揚。溢れる自信と誇り。

そこだけが保たれ、認知症の過程がそれ以外の場面を蝕んでいく。

一人暮らしの日常生活が、どんどんと維持できなくなる。家族やかつての知人に、頻回に連絡を取るが、その内容が次第に滅裂になっていく。金銭を厳密に管理していた人が、銀行で訳のわからないことをしてしまう。

妻の遺影を抱えて、うろうろすることもあった。

私は精神科医として、地域の福祉の方面からの要請で、その人を何回か訪問し、信頼関係を作っていた。嫌がって仕方がなかったのを、先生の顔を立てて外来に通ってもらうようにした。その時は、「俺はいんだけど、もし俺が精神科に通っているなんてことになったら、子供や孫に迷惑をかけるんじゃないか、それが心配なんだよ。世間はそういうもんなんだよ。分かってくれよ、先生」と話す。しかし、その子供がこの父の処遇に困って、その相談にも私が乗っていることを、彼は知らない。

ついに無謀な自動車の運転をくり返すようになり、家族や地域の福祉・介護の担当者、私で協議して、本人を入院させることにした。入院時の面接でも、故郷に貢献し

た自負と、これからの復興に向けて尽力したい意志を語り続ける。私は、その話を傾聴しながら、ある意味では自分がその人を裏切っていることを知っていた。入院後、本人を説得して運転免許を返還させる手続きを家族と進めた。入院してしまった後の彼は、もはや認知症の患者であった。病棟の中で居心地悪そうに過ごし、丁寧ではあっても病棟の看護師には打ち解けない様子。私を見ると、懐かしい知り合いにあったかのように、親しげな表情を向けてくれるが、それが私には心苦しかった。症状は進んだ。

自宅退院を断念し、施設入所の手続きを行ったが、その作業は淡々と行われた。

科学の言葉は、そして自然科学の嫡子をもって自らを任ずる医学の言葉は、切り裂く言葉だ。それは、日常語が持っている暖かさや親しみを持っていない。

「この辺りの放射線の空間線量は、 $0.3\mu\text{Sv}/\text{時間}$ 」などと言われる時に、私にとつての住まいであったり、仕事場であったり、学ぶ場所であったのが、生きた意味をばぎ取られた客観的な空間になってしまふ。血肉の通った私の生の一部に組み込まれていたものが、突然一部切り取られて、何だかよそよそしいモノになってしまふ。

2011年の秋口、私はある老婆と話す機会があった。震災の時に避難したかったけれども、心臓の病気があったので、自宅に留まっていたのだという。その時の様子を、東京から来た私に熱心に話してくれていた。その時は、外から人が来てくれるのがとにかく嬉しいと、歓迎をしてくれた。正直、なまりが強く聞き取れないことがある。そんなおばあさんが、突然きれいに「セシウム137」と発音した、その異様さ。

非日常であるはずの、裸のままの科学の言葉が、こんな老婆の日常生活のなかにまで、しっかりと入り込んでいたこと。

「自分の住んでいる場所の線量は〇〇 μ Sv」、そんな言葉が、コミュニティのあり方を決めるコミュニケーションの、根本に近いところに入り込んでいること。

体の外傷（トラウマ）の話。

昔は、細菌が感染をしないように、毎日消毒をしてガーゼを当てることが基本の処置だった。しかし最近では、それが創傷治癒を遅らせることが分かってきた。

なぜかと言うと、傷口にぐちゅぐちゅとしみ出してくる組織液、あそこの中に組織の再生を促す物質が大量に含まれていて、これが細胞の培養液のような働きをするらしい。だから、たとえば傷口の外にラップをかけて、その組織液で傷口が覆われている状況を作るのが、早く傷口を回復させる道なのだ。

ただ、その場合には、毎日消毒をするよりも注意が必要。細菌感染が起きた場合には、その組織液は細菌にとつても培養液のような働きをしてしまう。だから、できれば毎日、流水でしっかりと洗うことが望ましい。その他にも、傷口が汚いと、組織液がたくさん出過ぎて、周囲の健康な皮膚をふやけさせてしまうことがあり、それも防がねばならない。つまり、まめに手をかけて上げねばならないのだ。

（詳しくは、「褥瘡のラップ療法」のようなHPを調べてみてほしい）

実はこれ、「こころの外傷（トラウマ）」からの回復でも同じことだなあ、と思う。

医学的な診断を下し、投薬を含めた医学的な治療を行うことは、こころの傷口を消毒して、ガーゼを当てる作業に似ている。

もちろん状況が切迫していて、大きな外科手術が必要だったり、すでに感染を起こしている・あるいは感染の危険性が高かったりするなどの状況であるのなら、迷わずに傷口を消毒しなければならない。つまり、「うつ病」「PTSD（外傷後ストレス障害）」「アルコール依存症」「認知症」などの病名をつけて、精神医学的な治療を開始することが、必要不可欠となる。

しかし、それほどではない傷口の場合には、やたらと精神医学的な診断をつけて処置を開始することが、回復のために望ましいとはとても思えないことがある。

体の傷口から自然と沁みだしてくる組織液のように、こころが傷を受けた時に、沁みだしてくるもの。

これが、他の人に伝わる形となった時に、アートとみなされるかもしれない。

言葉であるならば、それが詩であり、文学であろう。

それが歌になり、音楽となるかもしれない。

病んだ自分や家族を包み込んでくれる空間を作ろうとする営みは、建築となり、さまざまな工芸品を生み出すだろう。

見てしまった奇妙なものを、自分の生に飼いならして表現しようとするならば、絵画作品が描かれるかもしれない。

そういう「傷口から自然にぐちゅぐちゅと染み出てくるもの」に触れ続けている時に、私たちのこころの傷からの回復も、早められるかもしれない。

ことばにならない思い、記憶に形が与えられること。
できれば、そこにアートが立ち現れてほしい。

ひよつとしたら、理想的なコミュニケーションが実現している時に私たちは、何も表現を行わないかもしれない。以心伝心。ひよつとして、テレパシー？ 私の気持ちを、あなたは分かってくれるし、あなたの気持ちも、私には分かっている。

しかし、当然、どこかで通じない場面が出てくる。
私たちがコミュニケーションをわざわざ取ろうとするのは、ディスコミュニケーションの経験で傷ついたから、それをくり返したくないと思うからかもしれない。

会議室で頭の良い人たちが考えた、「まちづくり計画」のようなものを、トップダウンで実施しようとするのは、どちらかというと毎日傷口を消毒する手法に近いように思える。だれの傷口にも、基本的には同じ手法を用いることが可能だ。

清潔で、効率的。

でも、それは深いところで、ディスコミュニケーションの悲しさと苦しさ、つまり思いと考えが共有できないつらさを、癒してはくれないのではないか、という疑問も

感じてしまう。

ひよつとしたら、コミュニケーションはまったくバラバラで、一致なんかしていなくて、お互いに全然話の通じない状況になっているのかもしれない。みんな、自分のことだけで目いっぱい、他の人のことを思いやる余裕なんか、本当はないのだ。
それなのに、焦って、例えば年間目標を強引に定めてしまう。

私は少し天邪鬼なところがあって、そんな時に、「いつそのこと、もっとディスコミュニケーションの、話の通じない苦しさを味わって、ちゃんと絶望すればよいのに」と思う。消毒してガーゼを添えれば、ぐじゅぐじゅしているところなど見なくても済む。
でも、それでは、ディスコミュニケーションの傷口を再生させるための、組織液は沁みだしてこない。

決して、通じない、つながらない相手に向かって、それでも何とか呼びかけようとする。効率を優先すれば、無駄としか思えないその営みが、必要なかもしれない。
それが成功した暁には、一つのアートのように見えることだろう。

私たちのコミュニケーションは、だれに呼びかけるのだろう。

コミュニケーションの生産品を買ってくれる消費者や、潜在的な観光客を呼び込むためのPRばかりではないだろう。

私たちが、先に進むためには、自らの立ち位置について知らねばならない。そのために必要なのは、コミュニティの過去の姿と触れ合うことだ。歴史であり、文化であり、地域が生み出してきた芸術作品の数々であり、今も伝わる伝統芸能だろう。

共通の誇れる文化を持つていることが、いかに私たちのアイデンティティーの感覚を支え、お互いを結び付けてくれることか。

ひょっとしたらコミュニティの一部が、震災や、その他の時代の力で、壊されてしまったかもしれない。きついかもしれないけど、その悲しさを悲しみ、失われたものに思いを馳せることも大切だろう。私たちが私たちであり続けるために。

そして、私たちのコミュニティは、未来のコミュニティに語りかけることも忘れてはならない。自分たちが受け継いだものを、どのような形で未来につないでいくのか。子供たち、孫たち、その先へと。

そして、私たちが想像力によって先取りした未来のコミュニティから、今の私たちに呼びかけられていることにも耳を澄まそう。

現在は、過去と未来から支えられている。

論理的な、すべてを消毒してしまうような、性急で優秀な言葉を急いで積み重ねることは、本当にしばらくやめてしまえばよいと思う。

5年前に起きたこと、それに引き続いて起きた出来事についての思いは、強引に蓋をしているだけで、まだあるべきところまで取り扱われていないと思う。

アートには、そこを超える力があると思う。

今回の小論では、アートへの、精神科医である私からの一方的な期待を語ってしまった。しかし、本当にこれは私にはできないことなので、アートへの関わりが深い人々に受け取ってほしい思いなのだ。

そして、唐突かもしれないが、本論の最後は、この言葉で締めくくりたい。

東日本大震災およびそれに関連したさまざまな事象で、命を失われたすべての方々に、ここからの哀悼の意を表します。

本書をお手に取ってくださった方は、少なからずコミュニティ問題、または被災地支援活動に関心のある方かと思います。震災で複雑化してしまった地域のコミュニティ再構築についての取り組みを記した本書は、様々な地域のコミュニティ課題に資する内容になっています。全編を通して読んで頂くことでコミュニティアートに対する理解が深まり、皆さまの地域におけるコミュニティ課題解決への一助になるのではないかと思います。

昨年度、私たちは様々な価値観のもとで暮らしていかなければいけない市民の心の拠り所となる支援を展開していくにあたり、必要な知見やノウハウを学び、今後起こり得る様々な課題に備えた支援策をマネジメントできる人材の育成を目的に「マナビバ。」を実施しコミュニティ課題とその解決策について学びました。

そして、今年度はその知見をもとに、いわき市小名浜の下神白地区にある復興公営住宅にて「手作業」や「食」を媒介に、地域の人と人をつなぐアートプログラム「イナミニティ」を実施しました。

現場の生の声に昨年度の「マナビバ。」等で関わってくださった方々の寄稿を合

わせた各章を振り返り、浮かび上がってくるコミュニティ課題と、課題へのアートプロジェクト特有の効用やその必要性について考えていきたいと思います。

・10の提言

ここでは、今回私たちが得た知見を、あえて「提言」という形で記していますが、率直に言えばこれらはすべて私たちの「学び」そのもの。住民との信頼関係の築き方、地域との交わり方、そして住民の皆さんのレジリエンスについてなど、実践を通じて多くの学びを得ることができました。改めて振り返るならば、10ある提言はすべて「自立」を目指していることに改めて気づかされます。私たちがコミュニティアトに関わるうえでの基本姿勢を再確認させられます。

・当事者聞き取り

当事者の聞き取りでは、先の提言以上にリアルな声を聞くことができました。私たちは「アートプロジェクト」として捉えていても、住民の皆さんにとっては「日常」そのもの。そこに、私たちはどのような立場からどのように振る舞えばよいのかのヒントが隠されているような気がします。

・事業報告会レポート

事業報告会のレポートからは、みんぷく天野和彦さんの講演、そしてその天野さんに加え、アーツカウンシル東京の森司さん、アーティストの開発好明さんと北澤潤さんの4人が繰り広げたパネルディスカッションの模様を収録しています。4人の言葉から、コミュニティアートの現在位置、そして未来が炙り出されました。実践するアーティストの声は、やはり説得力があります。

・寄稿①

小山さんには「高齢化社会で必要とされるコミュニティアート」をテーマに、高齢化社会におけるコミュニティの再構築という意味で、アートに期待するところ、必要とされるスキル、必要とされるアーティスト像などを、経験を踏まえてご寄稿頂きました。何度もしわきに足を運ばれ、被災地の事情にも詳しい小山さんから、いわきの取り組み等にも触れて頂いたうえで、福島で行われているアートプログラムにどんな価値があるのか、お書き頂きました。

・寄稿②

福島県立博物館の学芸員として、震災の記憶の風化に抗うために博物館がやるべ

きことをWebサイトのインタビュアー (<http://f-geijyutsukeikaku.info/2015/archives/255>) で語ってくださった川延さんから「震災後の被災地におけるアートプログラム」をテーマに、被災地での取り組みを被災地だけのものとせず他の地域でも応用できるような提言、そして福島で行われているアートプログラムにどんな価値があるのかをご寄稿頂きました。

・寄稿③

堀さんには、精神科医から見るコミュニティとアートについてご寄稿頂きました。昨年の「マナビバ。」でも触れて頂きましたが、ふるさとを失ったり、文化を失ったり、私たちの目に見えない「誇り」が失われた震災と原発事故。その中で人はどのようなレジリエンスを果たしていくのか。思いと考えが共有できないつらさ、それでも呼びかける「営み」と乗り越えた先に見つかる「つながり」の大切さ。

そしてアートに期待することについて、専門的な視座から語って頂きました。

「イトナミニティ」で実施した取り組みや得られた知見、経験、ノウハウは、モデル化、アーカイブ化していくことで、これから他の地域で災害が起きた際に活か

すことのできる内容であるのはもちろん、これから訪れる超高齢化社会での地域コミュニティの「もやい直し」などへ活かされるべき内容となっています。

内容を活かすと言っても、ハード（ワークショップの形）をそのまま使うのではなく、ソフト（ワークショップでの考え方や、地元の方々の意見や態度の受け方）をモデル化していくことが重要であり、そのために、今やっていることを続けていくこと、そして広く伝え続けていくことが必要なのです。

最後になりましたが、「イトナミニティ」実施にあたりご助力くださった3・11被災者を支援するいわき連絡協議会（みんなぐ）の皆様はじめ多くの方に厚く御礼申し上げますとともに、「イトナミニティ」の趣旨を理解し参加してくださった地域の皆様、そして本書製作に際しご協力くださった方々に心から御礼を申し上げます。

2016年3月







2015年度 イトナニナイプログラム 活動実施記録

- － 5 / 28 (木)
- 天野復興支援プロジェクトユーザー（みんなく）、コーディネーター（Wunder ground）、福島藝術計画 × ART SUPPORT TOHOKU-TOKYO（以後福島藝術計画）チーム顔合わせ、課題の共有と目的の確認を実施。午後はNPO法人コミュニティ・コーディネーター・タンク代表、小山淳子氏も加わり、下神白復興公営住宅集会所を視察。
- － 6 / 4 (木)
- コミュニティ交流員（みんなく）、コーディネーター、福島藝術計画チームの初顔合わせ。天野復興支援プロジェクトユーザーが仲立ち人となり、2015年度の協力体制、年間プログラムの概要について（七夕、ちぎり絵、おでん）協議。
- － 6 / 11 (木)
- 交流員、コーディネーター、アーティスト「とつくん」初顔合わせ。七夕プロジェクトについて協議。戸さんの作品を初めて拝見する。集会所に初めて住民の制作物が展示される。アーティスト「とつくん」から交流員に、他の住民にも展示のお願いをして見たらどうか提案が行われた。
- － 6 / 12 (金)
- 交流員により、集会所に七夕祭り制作に向けた住民用の告知チラシが貼り出される。以後、交流員により各戸訪問の際に「集会所への趣味制作物の展示のお願い」と七夕祭り制作への参加のお願い」が実施される。七夕プロジェクト材料買い出し（コーディネーター）
- － 6 / 25 (木) 【集会所】
- 交流員、コーディネーター、アーティスト「とつくん」、はま・なか・あいつ文化連携プロジェクト実行委員会、下神白団地住民の初顔合わせ。七夕プロジェクト開始。6 / 29 にWSを実施する旨を伝え、どんなもの作りたいか考えてもらう。
- － 6 / 28 (日)
- 飾りのモチーフとして「福を集める熊手祭り」に決定。アーティスト「とつくん」により下絵が描かれ、交流員に提示。6 / 29 から集会所に貼りだされた。
- － 6 / 29 (月) 【集会所】
- 交流員、コーディネーター、アーティスト「とつくん」、はま・なか・あいつ文化連携プロジェクト実行委員会、住民による制作物のアイデア出し。WSの後に趣味でクラフト作品を制作している住民の家を訪問。「集会所への趣味制作物の展示のお願い」と七夕祭り制作への参加のお願い」を行う。
- － 6 / 30 ～ 7 / 2 【集会所】
- 交流員と住民による制作。コーディネーターが随時進捗を確認し、アーティストに連絡・相談。
- － 7 / 5 (日)
- アーティスト「とつくん」の依頼により、地元アーティスト「十中八九」の手で熊手祭りのフレームが制作され、集会所に納品される。
- － 7 / 6 (月) 【集会所】
- 交流員、コーディネーター、アーティスト「とつくん」、アーティスト「典子」、はま・なか・あいつ文化連携プロジェクト実行委員会、住民による、熊手祭り制作WS。
- － 7 / 7 ～ 7 / 9 【集会所】
- 交流員、コーディネーター、はま・なか・あいつ文化連携プロジェクト実行委員会、住民による、熊手祭り制作WS。コーディネーターが随時進捗を確認し、アーティストに連絡・相談。
- － 7 / 13 (月) 【集会所】
- 交流員、コーディネーター、アーティスト「とつくん」、住民による、熊手祭り制作WS。徐々に余白の時間が生まれる。
- － 7 / 14 ～ 7 / 16、7 / 21 ～ 7 / 23、7 / 27 ～ 7 / 30、8 / 3 【集会所】
- 交流員、コーディネーター、住民による、熊手祭り制作WS。
- － 8 / 4 (火)
- 交流員、コーディネーターにより、いわき市平に熊手祭りが搬入される。
- － 8 / 6 ～ 8 / 8
- 平七夕まつり本番。熊手祭りは、交流員、コーディネーター、はま・なか・あいつ文化連携プロジェクト実行委員会、地域住民、地元アーティスト「十中八九」の手でいわきの空に上げられた。また、8 / 6 には「みんなく」主催のバスツアー（50名程度の参加）が行われた。
- － 8 / 11 (火)
- 天野復興支援プロジェクトユーザー、交流員、コーディネーター、はま・なか・あいつ文化連携プロジェクト実行委員会にて、七夕プロジェクトの振り返りと今後の展開について協議された。「手を動かす企画」をどめない事、男性参加者を増やす事が課題である事が共有された。コーディネーターから、いわきまちなかアートフェスティバル「玄玄天」へ出展する為の作品を作るプロジェクトの提案がされた。
- － 8 / 17 (月)
- 交流員により、住民、コーディネーター、アーティスト「とつくん」、はま・なか・あいつ文化連携プロジェクト実行委員会を交えた「七夕おつかれパーティー」が開かれた。アーティストにより次のプロジェクトに「ちぎり絵」の手法を用いる事が提案された。
- － 9 / 11 (火)
- 集会所には「ちぎり絵屏風」の下絵を制作する為の写真の募集が始まった。
- － 9 / 17 (木) 【集会所】
- ちぎり絵屏風「下神白海灯台物語」の制作WSがはじまった。まずは交流員、コーディネーター、アーティスト「とつくん」、住民によって下絵のアイデア出しWSが行われた。

ー 9 / 24 (木) 【集会所】

交流員、コーディネーター、アーティスト「とつくん」、住民でのフォトコラージュによる下絵の制作が行われた。

ー 9 / 28 ~ 10 / 22 【集会所】

交流員、コーディネーター、アーティスト「とつくん」、住民によって、制作が行われた。

アーティストの参加は 10 / 1、10 / 8、10 / 15。

ー 10 / 26、11 / 2 【集会所】

コーディネーターが、みんなよく主催のペンチ作りの初回打合せ、制作に同席し、「おでん屋台制作WS」にむけて参加者の動向をリサーチした。

ー 11 / 4 (水)

交流員、コーディネーターにより、住民の皆さんと制作した作品をいわきまちなかアートフェスティバル「玄玄天」に展示した。

ー 11 / 9 (月)

「みんなよく」主催の玄玄天バスツアー（45名程度参加）が行われた。

ー 11 / 16 (月)

交流員により、住民、コーディネーター、アーティスト「とつくん」を交えた「玄玄天おつかねパーティー」が開かれた。住民のみなさんと作品の保管について話し合いを行い、少しの「思い出」を残して作品を解体する事に決め、作品の解体を行った。次年度、またみんなで作ろうと約束をした。

ー 12 / 7 (月)

アートプログラムの実践手法などについて学ぶ「マナビバ、mana viva」を開催。交流員、コーディネーター、福島芸術計画チームが出席。ゲスト講師は、アーツカウンシル東京のプログラムオフィサーである佐藤孝青さん。

ー 12 / 24 (木) 【集会所】

交流員によりクリスマス会が企画され、コーディネーターが同席。1 / 18より「おでんプロジェクト」が開始される事が告知された。

ー 1 / 18 (月)

「おでんプロジェクト」が開始された。まずは住民のみなさん、交流員、コーディネーターが同列である事、みんなで作るお祭りである事が共有された。

ー 1 / 19 (火)

交流員、コーディネーター、アーティスト「とつくん」、住民のみなさんで制作する屋台についての合意を得る為のWSを行った。

ー 1 / 25 (月)

交流員と、コーディネーター、住民による屋台の制作が行われた。

ー 1 / 26 (火)

交流員、コーディネーター、アーティスト「とつくん」、住民により、屋外で男性を中心とした屋台制作WS、屋内で女性を中心としたお祭り企画運営WSが行われた。

ー 2 / 11 (月)

交流員と、コーディネーター、住民による屋台の制作が行われた。

ー 2 / 21 (火)

交流員、コーディネーター、アーティスト「とつくん」、住民により、屋外で男性を中心とした屋台制作WS、屋内で女性を中心としたお祭り企画運営WSが行われた。開催するお祭りの名前を「ひなおでんまつり」とした。

ー 2 / 29 (火)

交流員、コーディネーター、アーティスト「とつくん」、住民により、屋外で男性を中心とした屋台制作WS、屋内で女性を中心としたお祭り企画運営WSが行われた。実行委員会「チーム下神白祭りグループ」結成。おでん以降も季節に合わせて企画が行えるように体制を整えた。

ー 2 / 10 (水)

2015年度の福島芸術計画事業成果報告を元に、公営住宅における福島県が抱える課題の共有化と、アートプログラムによる課題解決の可能性について、有識者を交えたシンポジウムを行った。

ー 2 / 16 (火)

交流員、コーディネーター、アーティスト「とつくん」、住民により、屋外で男性を中心とした屋台制作WS、屋内で女性を中心としたお祭り企画運営WSが行われた。意見の食い違いで衝突が起ころも、住民間で代替案が自然とできた為、険悪な雰囲気にはならず問題が解決された。

ー 2 / 23 (火)

交流員、コーディネーター、アーティスト「とつくん」、住民により、屋外で男性を中心とした屋台制作WS、屋内で女性を中心としたお祭り企画運営WSが行われた。本番に向けて土気が高まった。

ー 3 / 1 ~ 3 / 2

交流員、コーディネーター、住民により、祭り本番に向けた準備が行われた。

ー 3 / 31 (木)

「ひなおでんまつり」が開催された。次回はやきとりや焼きそばをやるう！と、積極的な意見が出た。

福島藝術計画×ART SUPPORT TOHOKU-TOKYO 2015年度事業報告書

発行 2016年3月
福島県、東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）
特定非営利活動法人 Wunder ground

制作 特定非営利活動法人 Wunder ground

文・編集 小松理度（ヘキレキ舎）
※ 実施記録：特定非営利活動法人 Wunder ground

写真 小松理度（ヘキレキ舎）、中村幸稚、特定非営利活動法人 Wunder ground

デザイン 藤城 光

〔 冊子及び事業への問い合わせ先 〕

特定非営利活動法人 Wunder ground（福島藝術計画×Art Support Tohoku-Tokyo 事務局）

□ TEL 090-1938-0170

□ MAIL tas.fukushima@gmail.com

□ URL <http://f-geijyutsukeikaku.info>

事業名 福島県 「福島県 アートによる新生ふくしま推進事業」
東京都 「東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業（福島）」

主催 福島県、東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）
特定非営利活動法人 Wunder ground

